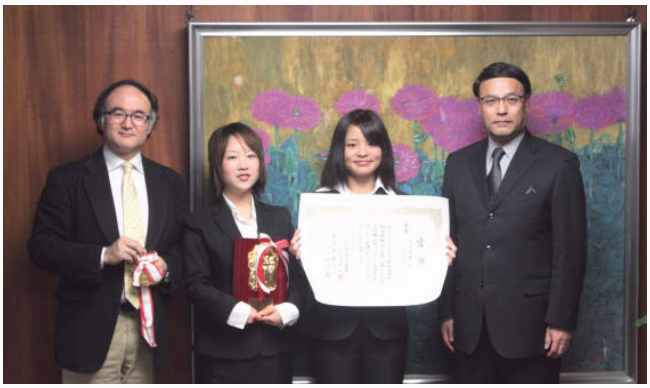
都留文科大學報

第118号
2012年
3月16日（金）

編集　都留文科大学広報委員会

〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　都留文科大学内
☎ 0554-43-4341　URL：http://www.tsuru.ac.jp/

東桂保育園生を招いて「森のようちえん」


全国合唱コンクールの金賞受賞を都留市長へ報告

学生による太陽光発電ＥＣＯイルミネーション

つるビー（都留市観光キャラクター）来校

「さよなら文大」退職教員から …… 2

文大生活雑感　植村憲治教授
過ぎにしこと、思ひ出づるままに　髙橋宏幸教授
今、大学を去るにあたって　田中実教授
思い出のつまった 15 年間　窪田憲子教授
都留文科大学を退任するにあたって　中益陽子講師

平成 24 年度の入学試験状況など …… 7

学長の再任にあたって
平成23年度卒業者･修了者予定数、平成24年度入学試験状況

おくることば・旅立つことば …… 8

初等教育学科　佐藤　隆教授／国文学科　佐藤明浩教授
英文学科　西出公之教授／社会学科　村上研一准教授
比較文化学科　邊　英浩教授／大学院　田中昌弥教授
初等教育学科　大濱朱加／国文学科　廣田絵未
英文学科　柚木奈津美／社会学科　知念浩生／畑中健志
比較文化学科　林友理恵
文学専攻科　伊東一磨
大学院　国文学専攻　岡田祐輔
社会学地域社会研究専攻　雨宮舞子
英語英米文学専攻　久保田琴乃
比較文化専攻　薛玉珊
臨床教育実践学専攻　笠井正宏

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 …… 20

初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科（現代社会専攻／環境･コミュニティ創造専攻）
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより …… 36

初等教育学科主催講演会
国文学科主催秋季講演会
英文学科・英文学会共催後期講演会
文学研究科　英語英米文学専攻主催講演会
社会学科・地域社会学会共催講演会
比較文化学科主催講演会
ジェンダー研究プログラム 7 周年記念講演会

文大だより …… 43

地域交流研究フォーラム／文大合唱団の活動について
キャリアサポート説明会／文大名画座
県民コミュニティカレッジ講座
甲州俳諧展―素堂（そどう）と句合（くあわせ）／やまなし観光カレッジ
震災時学生アンケートについて
卒業演奏会を終えて／卒業制作展を終えて
編集後記／本　ぶんだい堂 …… 52

さよなら文大　―５名の教員が退職

今年度で植村憲治教授（初等教育学科）、髙橋宏幸教授（国文学科）、田中実教授（国文学科）、窪田憲子教授（英文学科）、中益陽子講師（社会学科）が惜しまれながら退職となります。なお、中益先生は４月から、亜細亜大学へ移られます。ここでは本学の発展のためにご尽力くださった５名の方々に、本学での思い出を語っていただきます。ありがとうございました。

文大生活雑感

初等教育学科教授　植村憲治

植村憲治教授

私が都留文科大学に赴任したのは昭和 52 年 10 月でした。当時の建物は現在の１号館と体育館、建て替え前の古びた美術棟と音楽棟でした。算数教室は３人の教員が１部屋に入り、電話は壁の間に置いてあるものを、隣の国語教室と共用していました。それでも、年長の先生方は、「今の先生たちは恵まれている」とおっしゃっていました。移転する前の市役所付近にあった時代の苦労話、学食の給仕を教員もしていたことなどを聞かされました。だが、当時の方が学生も教員も使命感に燃えて過ごしていたようです。

長く教員をしていると学生との間にも、思わぬ関係が出来てきます。姉妹、姉弟でゼミに入ってきたもの、ゼミの同期生同士で結婚したものなどです。親子でゼミ生はいませんでしたが、ゼミ生の子供が私の授業を受けたケースがありました。また、親子そろって文大生同士で結婚というゼミの卒業生もいます。教育実習で訪問した先の指導教員が教え子ということもありました。

教員同士の付き合い方も大きく変わってきました。３学科から５学科に増え研究室が離れ離れになったこと、文大前駅が出来て、大月駅までの学バスが無くなったこと、さらに、独法化以降、他学科人事に対し関心が薄れたことなどがあり、他学科の教員と互いを深く知り合うための機会が大きく減りました。大学としての一体感をどのようにして構築していくかが重要ですが、小手先だけの改革では無理ではないかと危惧しております。

赴任時の私の研究分野は計算機数学といわれるものです。その中でも有限オートマトンの代数的研究をテーマとしていました。それを続けながらも、初等教育学科の専門性と合致する研究テーマを求めていました。コンピュータ利用の教育などにも取り組みました。近年は幼児の数概念の理解能力や獲得について保育所で実験を行い、それらの結果を分析したものを論文にしております。学会誌にも論文が掲載され、一定の成果は得られました。幼児の数概念教育は、保育士、幼稚園教諭、保護者が実践して初めて有効なものになります。そのため、昨年８月には地域交流研究センターにお願いして、研究報告会を開催しました。周知期間が短かったのですが、40 人以上の出席があり、熱心に聞いて頂けました。今は、「５までわかれば算数はできる」というキャッチフレーズで、数概念の色々な指導を考えています。一言で言えば、10 まで数えられるようにする前に、５までの概念が理解できた段階で様々な指導をしようということです。可能なら来年度以降も続けたい報告会です。

研究報告会にて

本部棟が建ったときから使用してきた研究室の鍵も、そろそろ返さなくてはなりません。私の人生も、これからは頂いてきた様々なものをお返しすることになるのかなと感慨にふけっております。

「さよなら文大」　退職教員５名から

過ぎにしこと、思ひ出づるままに

国文学科教授　髙橋宏幸

髙橋宏幸教授

昭和56年に本学に採用されてから31年、退職の時を迎えました。北海道教育大学（釧路校）で８年、併せて39年間の教壇生活でした。２月２日に、風邪で休講した分の補講をしましたが、それを個人的に「最終講義」としました。ところがその教壇で思いがけず、昨年度の受講生数名から花束をいただきましたこと、実に有り難く、感激しました。

研究室の片付けで31年間に関わってきた大学運営に関する大量の書類を廃棄がてら、そのうちの３件について、思い出すままに、そして今の考えを記してみます。

法人化前の各委員会では、学生（厚生）委員以外はほとんどの委員を経験しました。その中でも、予算委員長は数回しました。大学の予算書・決算書、時には出金伝票を精査するなど大学の総体を把握し、各学科の教育・研究費に関しては事業ごとの積み上げ方式という予算の立て方は教育・研究になじまないということで、旅費を別枠にし、学生・教員の単価積算＋学科運営経費という基準を作り、全学科の学生に平等に反映するよう決めました。法人化にあたり財務会計の研修会で講師から「授業料とは学生からの借金だ」という説明がありました。故に大学としては授業と設備、施設で学生に償還しなければならないという考え方でないとなかなか教育効果を上げる方策に結び付かないであろうと思われます。その時その時の状況に相応しい財政運用をしていくことが大事で、現在では細かなことを含めもっと教育環境に経費を掛け改善する必要があるように思います。

もっとも大変だったのは大学院研究科委員長の時でした。平成７年に発足、学科主任として設置に関わり、その後２期４年に渡って務めました。大学院規則と一応の履修規定はありましたが、次々と生ずる事態にその時々で対応していかなければならず、しかも研究科委員会はあるものの運営組織はもちろん副委員長もいず、すべて委員長一人で判断し実務もするという状態でした。２専攻の時は何とかこなせましたが、英語英米文学専攻を増設したとき、反対はありましたが学部に準じた組織と運営規定を整備しました（その経験からか学内の規定整備などに関する規定改正委員長を法人化するまで務めました）。修士課程だけの大学院で院生をどう育てていくか、志願者を増やすためには院に進んで良かったというメリットの実感が必要でしょう。ポリシーを踏まえ徹底した教育で院生に目的に向かって邁進させ実績を作ることからしか発展はないのではないかと思います。

評議員を務めたときは主な委員会にはすべて出席し、大学全体の動きを把握しました。歓迎しない任務もありましたが、途中からカリキュラム改定委員長を務め、現行のカリキュラムを作りました。25年度には新カリキュラムがスタートするそうですが、重要なことはそのカリキュラムを設定方針・意図通りに実施するということです。それぞれの科目の目的、位置付けを担当の非常勤講師にも周知して、大学として、学科としてカリキュラムを運営しなければ、どんな立派なカリキュラムも画餅になってしまいます。

最後の仕事でした法人化準備室長代行、最後まで詰めたかった幾つかの心残りはありますが、委員会の委員に、学生の生の声を耳にする職員を加えたことは学生にプラスの運営になると思っています。５０周年を迎えたときのキイワードは「奇跡」でしたが、奇跡とも思われたことを５０年の「軌跡」にすることができたのは、運営態勢が教員・職員にあったからだと思います。新体制での８０周年のキイワードは、さて。

「さよなら文大」　退職教員５名から

今、大学を去るにあたって

国文学科教授　田中　実

田中　実教授

都留文科大学に赴任したのは一九八〇年、以後三十二年間勤務しました。その間の世の中の変化は都留の学生諸君の変化でもあり、いつの間にか、彼らは洗練されて様変わり、今ではすっかりおしゃれに見えます。しかし、そんなことより、最も変わったと思うことは全体にひよわ、というより、今こそ教師の介入、関わりを必要としている、言い換えれば、〈他者〉を必要としていると、感じます…。

わたくしにとって、大きかったのは同室の金子先生が比較文化学科に移られ、国文学科のスタッフも異動したこと。もう一つは一九九九年秋の四カ月間、北京日本学センターの客員教授として赴任したことでしょうか。

わたくしは都留在任期間のちょうど真中、一九九六年とその翌年、それまでの研究を二冊の単行本にまとめました。その後、研究の基本である〈原理論（グランドセオリー）〉に向かい、二年後「〈本文〉とは何か―プレ〈本文〉の誕生」を公表し、当時は何の反響もなかったのですが、これが現在のわたくしの理論の根幹をなし、第三項理論を形成させました。ええ、それはわたくし個人の専門に過ぎないのですが、文学研究全般の基本中の基本、国語科教育の基礎基本でもあるはずで、その論を構築することはわたくしに多大な精神的消耗をもたらしました。

日本文化史演習
中国保定市にて

少しだけ第三項理論を説明してみましょう。

眼前にある文学作品の文章、活字になっているその文字の客体とは読者にとって、いかなるものか、文学はどこにどう働くか、それを考えたのです。そんなことが何故大事で、またどうしてそんなに消耗するのか、不思議に思われるでしょう。読み手の捉える客体の対象の文章は読み手のフィルターによって変容するのですから、「正解」はない、文学の学会の前衛でも「ない」、アナーキー、全国の学校の国語の授業ではこれを曖昧にしてきました。もちろん、文部科学省も根本的にはこの難問（アポリア）を抱えています。

すなわち、捉えた客体の対象、その〈向こう〉を捉えることは可能か、そこはブラックボックスですが、視点を変えると、そこは虚無なのか、神様がいるのか、ちょうど永遠を考え続けると、こちらの頭がおかしくなる気がするのと同様の難問でしょう。これまで、文学作品の文章は、主体と客体、読書主体と客体の文章の二項と考えられていましたから、どうしても読み手それぞれのフィルターによって異なり、客体そのものは永遠にブラックボックス、「正解」は存在しないと考えられていました。しかし、そうではなく、「読むこと」とは読み手の捉えた対象を読み手自身が捉えることであり、世界は主体と客体と客体そのものとの三項で成立し、客体の対象を捉えることがそう捉えている主体自身を捉えることに反転し、主体自体を捉えることが客体の対象を捉えることに反転するのでした。

以来、私の研究室の戸棚にはトトロが隠れています。眼には見えないけれど、第三項のトトロが隠れています。しかし、もうその仕事も三月で終わります。

「さよなら文大」　退職教員５名から

思い出のつまった15年

英文学科教授　窪田憲子

窪田憲子教授

定年退職といえば、仕事の終着駅、研究者として完成された人、というイメージが私の中にあったので、自分の研究のゴールがまだ遠いと思っている私自身には、この４文字は少々残酷なゲートです。しかし、誰でもくぐらなければならない門を、本学で迎えられたのは大変幸せだったと感じております。

専任教員としての本学の生活は１５年だけですが、私にはちょっぴり自慢したいことがあります。それは、今から35年前の昭和51年当時の都留文科大学を知っている、ということです。教授の先生が急に辞められたとかで、私が半年間、非常勤講師として英文科のゼミを担当することになりました。その当時は―現在からは想像もできないと思いますが―、大学の建物は今の１号館のみ（！）で、図書館はなく、図書室は建物の一画にあったように記憶しています。大月の駅にマイクロバスが迎えに来て、１号館の入り口まで教員を運んでくれました。

当時、若造だった私は、ゼミの学生たちに対して、この本を来週までに読んでおくようにとか、あの本を新宿の本屋で買って予習しておくようにとか、今から考えると随分無茶な要求をしたものです。しかし、学生たちは、その乱暴とも思える私の要求にきちんと応えて勉強してくれました。「先生、東京に行ってこの本を買ってきました」と嬉しそうに報告した学生さんの言葉が今でも思い出されます。学生たちは学ぶことに本当に貪欲で、私が都留での授業担当をしなくなった後も、手紙をくれたり、遊びに来てくれたりしました。真摯な態度で勉強に向き合っていた彼らから、私自身、教師はどうあるべきか、ということを教わったように思います。

20年後に、縁あって本学に専任として戻ることになりました。まず驚いたことは、キャンパスが立派になっていたことでした。今の図書館以外は３号館まですべてそろっておりましたので、20年間に急速の進展を遂げたことが察せられました。また、それ以上に嬉しかったのは、まじめに勉強するという都留の伝統がしっかりと保たれていたことでした。

前任校がセミマンモス大学でしたので、都留の小回りのきく規模は大変新鮮に感じられました。学長が教授会の司会をなさり、教員ひとりひとりの名前と顔を覚えているという事が新しい発見でした。教員が大学全体においても、個として存在しているというのは、とても貴重な場に思われました。

教育がシステムとなり、教員がその歯車として機能するという風潮がある中で、本学においては、教員の個性を活かした教育が保持されているのは、本学の大きな長所です。また、教員ひとりひとりの発想が、大学経営に活かされることが多いのも本学の特質といえるかと思います。また、事務局の方々が、学生ひとりひとりのことをよく把握して対応しているというのも本学の得難い伝統です。このように個と個が結び付いた教育の姿勢が、今後もぜひ保持されていくことを願ってやみません。

ヴァージニア・ウルフが1927年に講演したケンブリッジ大学ガートン・コレッジで

「さよなら文大」　退職教員５名から

都留文科大学を退任するにあたって

社会学科講師　中益陽子

中益陽子講師

私が都留文科大学に着任したのは、2007年４月のことです。早いもので、あれからもう５年が経とうとしています。この５年間にさまざまな思い出深いことがありましたが、その一つが本学の独法化でした。

みなさん、大学の独法化で大きく変わるものといえば、何が思い浮かびますか。大学の自治や運営組織､財政制度、あるいはそこで働く者の労働条件でしょうか。これらと併せてもう一つ忘れてはならないのが、労使交渉に当たる担当者の変貌ぶり（お疲れ度）です。私の専門の１つが労働法ということもあって、大学の独法化の際に労使交渉に関与する教員を間近でみる機会が多くありました。ここ数年でさまざまな大学が独法化を経験しましたが、独法化の労使交渉を経験した方々（とくに労働法担当教員）のビフォー・アフターは、一筆に値するものです。ある人は10歳ほど老け、ある人は睡眠導入剤を服用して…、という状況を目の当たりにしていましたので､大学院時代には、これから独法化に取り組む大学だけには就職しないでおこう…、と若い研究者の間で囁きあっていました。しかし、ご縁があって、独法化を前にした本学に採用していただけることになり、独法化の際の労使交渉にも関与させていただくことになりました。

さて、実際のところ、独法化に関わったことが私にとってどうだったかと申しますと、結論からいえば、とても貴重な経験でした（ちょっと遠い目にはなりますが…)。労働法が実際の社会の中で機能する様子を実感できたことはもちろんですが、立場は違っても、この都留文科大学の将来を熱意と愛情をもって真摯に考えていらっしゃる方々が沢山おられることを知ったことが何よりの収穫でした。これからの大学は、厳しい時代を迎えることになるかと思いますが、このような方々に支えられた都留文科大学の将来は、きっと大丈夫、心配ないだろうと､大変印象深かったです。

ゼミ生がくれたみかん

私自身は、事情があって今年度をもって都留文科大学を離れることになりますが、初めての大学教員としての仕事先であり、また、独法化という本学の重大な節目に居合わせたことは心に残ることです。今後も、遠くからではありますが、本学の発展を心から祈っております。お世話になりました先生方、学生のみなさん、事務の方々、本当にありがとうございました。

学長の再任にあたって

都留文科大学　学長　加藤祐三

学　長　加藤祐三

学生の能力と個性を伸ばすため、学修環境をさらに充実させたい、学生が入学してよかったと実感する大学にしたい、このために微力をつくしてきました。再任にあたっての所感もまったく同じです。

まず教育研究審議会で「教員配置に関する原則（指針）」に合意し、全学的な将来展望を持って教員配置を行う基本的な仕組みができました。これに基づき昨年度は専任５名と特任２名、今年度は専任３名と特任２名の採用を決めました（就任はそれぞれ翌年度）。次年度以降に向けても同様に進める所存です。

昨年春、本学の教育・研究環境などの整備状況の点検と今後の課題を展開するため、４つのプロジェクトを立ち上げました。プロジェクトＡ（入試戦略）、Ｂ（教職課程と教職大学院）、Ｃ（カリキュラム改定）、Ｄ（学生支援の５センターの強化）です。うちプロジェクトＣ（カリキュラム改定）は、平成２５年度から実施する予定で、各論の詰めの段階に入ります。Ａ、Ｂ、Ｄも新たな段階を迎えます。

東日本大震災の教訓を活かし、学生・教職員・市民の生命と安全を守るため、昨年10月に防災委員会を作り、企画班を置きました。企画班の努力により防災マップ作製や避難訓練などの検討が進み、新年度のオリエンテーションに防災簡約マニュアルを配布するとともに、教養科目の１つとして「防災と減災」と「防災まちづくりワークショップ」を新たに開設します。

ひきつづき教職員のみなさんの知恵と発意と協力をいただきたく、よろしくお願いします。

平成23年度卒業者・修了者予定数

■文学部

- 初等教育学科 …… 209名
- 国文学科 …… 132名
- 英文学科 …… 126名
- 社会学科
  - 現代社会専攻 …… 88名
  - 環境・コミュニティ創造専攻 …… 53名
- 比較文化学科 …… 118名

■専攻科　文学専攻科

- 教育学専攻 …… 9名

■大学院　文学専攻科

- 国文学専攻 …… 3名
- 英語英米文学専攻 …… 3名
- 社会学地域社会研究専攻 …… 3名
- 比較文化学科 …… 4名
- 臨床教育実践学 …… 5名

平成24年度入学試験状況

平成24年度　推薦入学試験状況

学科名		受験者数	合格者数
初等教育学科		270	98
初等教育学科（芸術体育系・自然環境科学系）		32	23
国文学科		201	70
英文学科		82	44
社会学科	現代社会専攻	116	56
	環境・コミュニティ創造専攻	55	32
社会学科環境・コミュニティ創造専攻（活動評価型推薦）		7	7
比較文化学科		84	57

平成24年度　編入学試験状況

学科名	受験者数	合格者数
初等教育学科	10	6
国文学科	10	5
英文学科	11	6
社会学科	12	3
比較文化学科	8	5

平成24年度　前期日程入学試験状況

学科名		受験者数	合格者数
初等教育学科		89	37
国文学科		78	33
英文学科		71	49
社会学科	現代社会専攻	59	41
	環境・コミュニティ創造専攻	51	24
比較文化学科		74	56

平成24年度　中期日程入学試験状況

学科名		志願者数
初等教育学科		752
国文学科		720
英文学科		453
社会学科	現代社会専攻	308
	環境・コミュニティ創造専攻	175
比較文化学科		398

おくることば・旅立つ言葉

教員から・卒業生から・修了生から

問い続け、学び続ける人へ

初等教育学科教授
佐藤　隆

「卒業おめでとうございます。これまで学んだことを生かして、社会人として活躍して下さい」。これまでなら、この言葉で互いにわかりあえたつもりになれたのですが、東日本大震災を経験したいまは、そうはいきません。多くの犠牲と被害を生み出し、いまなお原発危機にあるなかで、私は、この危機を生み出した日本社会とは何だったのか、そのような社会で「社会人として活躍する」とはどういうことなのかを考えざるを得ません。それというのも、「原発安全神話」を作り出し、事故後も「想定外」を連発して、自らの誤りを認めずに平然としている人々こそ、おそらくは「学歴エリート」として、また「立派な社会人」として振る舞っていた人たちなのですから。しかし、この事態のもとで明らかになったことは、彼らが、情けないほど想像力に欠け、かつ恐ろしいほど無責任であったということです。もちろん責任は「私」にもあります。彼らを「責任ある立場」に押し上げ、彼らのことばを簡単に信じ、疑い考えないできた「私」自身の問題も問われています。

考えてみれば「原発安全神話」と似たような構造は、私たちの周りに張り巡らされています。教育の世界でも「学力さえつけておけば大丈夫」「学歴の高い人は立派な人」というような「学力・学歴神話」がはびこっています。競争原理と成果主義が幅をきかせるなかでは、学びは目的ではなく手段と化し、「何をどう学んだか」は「どれだけ覚え、得点できたか」、に簡単にすり替わってしまいます。

いま私たちに必要なことは、何のために、そして何をこそ、学ばなければならないのかを、原点に立ち返って考えることです。そして私たちが、「常識」だとして不問に付してきたことも、「それは真実か」と問い直すこと、そのために学び続けることだと思うのです。

本学の元学長である大田堯さんは、近著『かすかな光へと歩む　生きることと学ぶこと』のなかで、「学習の停止は死に限りなく近い」と述べています。

みなさんには、問い続け、学び続ける社会人になってほしいと思います。

真摯に粘り強くしたたかに

国文学科教授
佐藤明浩

国文学科のみなさん、ご卒業おめでとうございます。大学生活をいまどのような思いでふり返っているでしょうか。

多くのみなさんが入学した2008年には、リーマンショックがあり、４年生になる直前には、東日本大震災が起こりました。さらには、チュニジア、エジプトでの政権打倒…私が学生だった頃とは大きく違って、みなさんの大学生活は激動の世のただなかにあったと言ってよいでしょう。容易ならざることが待ち受けているであろう、それぞれの未来に思いを向けずにはいられません。

国文学科での学究をとおして、みなさんはどのようなこ

卒業生におくることば

大小の変動の中で

英文学科教授
西出公之

世の中は進歩するものだと思っていた。より豊かに、より便利になるものだと思っていた。長いスパンで考えれば、そうなのかもしれない。しかし、人の一生というレベルでは、そうではないようだ。バブル崩壊のような後退的な大変動はもうないだろうと思っていたが、リーマン・ショックが来た。大地震は神戸で終わりだろうと思っていたら、10年後にもっと大きなのが来た。

まことに世の中は変動している。そんな変動の世の中にあって、「皆さんの母校である都留文科大学は、変わることなく皆さんを見守っています」などと言えたら、どんなにか良いだろう。私にとっても都留文科大学は母校であり、そうであって欲しいのであるが、50年後はどうかということになると、心配になってくる。

都留市内にある二つの県立高校（桂高校と谷村工業）が統合されるらしい。高校生人口が少ないからである。桂高校の卒業生には寂しいことだろうが、桂高校の跡地利用が話題になっている。しかし、それだけでは済まないらしい。私が聞いたところでは、統合されて新しくできた高校も何年後かには別の高校と統廃合にならざるを得ないらしい。

先ごろ50年後の人口推計が発表された。2060年の日本の人口は8,700万人で、その40％が65歳以上の高齢者であるという。ならば、若年者は激減するということだ。50年先のことは推計であるにしても、今から15年後の高校生人口は推計ではない。今年生まれた子供の数とほぼ同じである。ということは、今の高校生人口は15年前に分かっていたわけだ。大学生人口の場合は、その3年前の出生者数×進学率ということになる。少子化による高校の統廃合が進行する中で、大学の統廃合は無いなどとは言えない。50年後、都留文科大学の跡地をどうするかを検討しているなどということは無いのであろうか。

技術革新は急激に進歩して我々の生活を変えつつある。発展すると思っていた経済が急に後退することもある。自然災害で生活や人生観が一変することもある。それに加えて、じわじわとダウン・サイジングが進行している。まことに世の中は変動している。

変わることばかりの中で、変わらないこともある。過去である。皆さんが「都留文科大学を卒業した」という事実は変わらない。通常なら4年間、留年すれば5年から8年まで、編入生であれば2年か3年、都留文科大学が自分の学び舎であったというのは事実である。「都留文大学卒」にプライドを持って生きて行ってほしい。都留文科大学卒業、おめでとう。そして、私と同窓になってくれて、ありがとう。Bon voyage!

とを感得したでしょうか。真摯に物事に向かい合い、課題を解決しようと苦闘しているとどこかで道が開ける、とともに新たな課題が生じてくる。それにまた真摯に取り組んでいく。そのような体験を積んだ人が多くいることを望んでいます。専門に直接関わる仕事に携わる人はもとより、そうでない人も上のような経験はどこかで生きてくることがあるでしょう。自身の成長を実感している人もそうでない人も、何はともあれ、都留の国文学科の課程を修了したことに、自信をもってください。そして、粘り強くしたたかに道を拓いていってほしいと願っています。

一教員としての思いは、上のとおりですが、一方、在学中、勉学よりもサークルに、また自分の好きなことに打ち込んだという人もいるでしょう。都留でともに過ごした仲間としては、それはそれでよいと共感します。桜花に彩られた山丘の景、キャンパスの紅葉の鮮やかな色。みなさんの心の眼には、折折、そこここの都留の風景が刻まれているでしょう。そして何気ない学生生活の一齣をふと思い出す。都留の形見が心に浮かんで、何とはなしに懐かしさをおぼえたら、ふらりとキャンパスを訪れてみてください。みなさんそれぞれが、自分なりの道を歩んでいる様子を見るのは、教員にとってとてもうれしいものです。再会の日を楽しみに待っています。

卒業生におくることば

社会学科の卒業生におくる言葉

社会学科准教授
村上研一

社会学科の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

社会学科での学びを通じて、現代の日本社会あるいは世界における諸問題・諸課題について理解を深めた上で、一人ひとり独自の問題意識に基づき、探究を進める学習を進めてきたと思います。そうした学習の集大成としての卒業論文は、皆さん自身の学問的生活の結晶として大きな意味を持っています。

しかし現在、教員免許の更新制・基礎資格の修士課程への繰り上げ、また就職活動での企業による学生選別の強化など、「大学卒業者＝一人前の社会人」と見做してくれない風潮も否定できません。他方、東日本大震災と原発事故で浮き彫りになりましたが、その他にも民主主義の根幹が問われる政治の混迷や、資本主義自体を問い直している世界的経済危機など、人類社会はこれまでの経験や想定、従来の延長線上にある考えでは解決できない諸問題を抱えこんでいます。こうした社会で活躍する皆さんにとって、社会学科で学んだ経験、その中で培った独自の問題意識、問題認識を振り返ることは、今後、困難に直面した時に、指針やヒントを与えてくれるものと思います。大学で培った経験を踏まえて、さらなる学びを続けていってほしいと希望します。

さいごに、社会の若い構成員である皆さんに、２つのお願いがあります。その２つとは、若いうちから「守り」に入らないでほしい、「利己」のみを追求しないでほしい、ということです。多くの成員が「自己保身」をはかる社会は、停滞し、殺伐としてくるでしょう。様々な問題に果敢に取り組む探究心と、排除や偏見のない広い視野を保持していってほしいと願います。

思い出の学び舎

「何かが起きる（something happen）」

比較文化学科教授
邊　英浩

今の日本では、大震災、放射能、財政破綻、大増税、さらにはギリシア危機に端を発した欧州危機が世界危機に連動するなどの暗い話題ばかりである。にもかかわらず今年卒業する学生には、やはり「おめでとう」という言葉を贈りたい。別に悲観する必要はない。もっと困難な時期は日本にも世界にもいくらでもあったし、現在もあるが人間は何とか乗り切ってきたのである。与えられた条件の中で人間は頑張るしかないし、そこに幸福を見つけ出すことができるであろう。

人間にとってどんな時でも変わらない真理がある。かつてパウロは迫害を自身が受けながら、各地の迫害を受ける信徒たちに書簡でイエスの力を伝えた。その最たるものは、「愛の賛歌」である。「信仰と希望と愛、この三つは、いつまでも残る。その中の最も大いなるものは愛である」（コリントの信徒への手紙一）。キリスト教では、愛は男女の愛、家族愛、隣人愛、友愛、神への愛などがある。儒教の洗礼を受けた東アジアの人間には、「信、希望、愛」、そして愛には天の愛まで含ませれば良かろう。「信と希望と愛」。この三つは全て、実は超越的なものと繋がっている。男女の愛、家族愛、隣人愛、友愛はわかりやすそうである。しかし実は親、兄弟も含めて他人のことを知り、通じること

卒業生におくることば

実践と理論をつないで

初等教育学科教授
田中昌弥

大学院修了、おめでとうございます。私も本学での大学院担当は二年目で、今年度修了のみなさんと一緒に歩んできたことになります。

日本の教育は、ご存じのように、すでに様々な課題に直面しており、今後も絶えざる変化が予想されます。変化の激しい時代には、即効性のある知識や技能が求められがちですが、それらは陳腐化も早いので、真の解決にはなりません。求められているのは、子どもの状況や教育実践を自ら分析し、臨機応変かつ本質的な対応のできる現場研究者としての教師であり、このことは、国際的な認識になってきています。そして、まだ実感はないかもしれませんが、みなさんはすでにその入り口に立っています。

みなさんは、本学で経験した研究・学習の意味をどのように振り返っているでしょうか。思いはそれぞれでしょうが、私が、教員養成大学の大学院と教職大学院を十三年ほど担当した後、本学の臨床教育実践学専攻の所属となって感じたのは、ここのプラットホームは、今日求められている理論と実践の往還に適しているということでした。

教員養成系の従来の大学院は、大学教員が専門とする研究方法を院生に伝授するための設計になっています。他方、実践志向を掲げる教職大学院では、長期間の実習を行う一方、修士論文は課さず、研究的なトレーニングも行いません。各々、理論と実践の片方に寄っており、両者を往還させる回路が十分ではないのです。また、研究者養成でも現場から遊離した研究の増加が由々しき事態となっています。

それに対して、本専攻でみなさんが経験した教育は、私から見ると、アカデミックな大学院と教職大学院のハイブリッドと言えるものでした。授業の多くが今日の教育の実態を前提とし、附属や地域の小学校で臨床実習的な研究も行っています。修士論文の多くも、教育実践や子ども・学校の具体的調査を足場とした理論研究です。

私の希望は、みなさんの修了を機に、今度は、対等のパートナーとして現場に即した共同研究ができないかということです。状況は厳しくても、理論と実践の往還をベースとして私たちが力を合わせれば、日本の教育に一つの展望を開くことも可能だと思います。

これからもよろしくお願いします。

ができるのかといえば、それはできない。だが友人との間、男女の間で、「何かが起きた(something happen)」、そして相互に通じた、という体験はしばしばする。そう、何者かがそうさせているということを体験する。超越的なものを通じて、人間は初めて他者と繋がることができる、という体験である。

今日本で『「英語」より「論語」を』というブームが起きている。『論語』を読んでみると孔子は天への畏怖を明確に持っていた。ところが以前の日本では論語と言えば人生訓として理解するものが多く、天が捨て去られている場合が多かったが、天の復活が今の日本に必要というのである。天無き態度が、誰も見ていないからと他人の払った年金掛け金を着服したりさせ、危機を深化させる。そして超越的なものを通じてこそ、他者と通じることができ、男女の愛、家族愛、隣人愛、友愛が実現するのであるから、幸福はそこにこそありえるのである。注意深く言い直そう。「神＝天を信じよ！」などという安っぽい顛倒はやめよう。誰もが幸せになりたい。そのため他者との愛を求める、その中で「何かが起きる(something happen)」、他者との「間（あいだ）」で。

旅立つことば　卒業生から

都留文科大学で得たもの

初等教育学科４年
大濱朱加

４年間を振り返ると、瞬く間に過ぎた日々が懐かしく思い返されます。都留で始まった大学生活は緊張感あるものでしたが、同時に開放的なものでした。兼ねてからの夢であった教師を目指しての専門的な授業は、これまでの学生生活とは違いとても刺激的なものでした。また、学部や出身地を問わず多くの友人ができました。毎日が新鮮に感じられ、自分の世界が広がっていくことが楽しかったことを覚えています。

特に３年生の時の教育実習は、「憧れ」がきっかけで教師を目指してきた私にとって、「先生になりたい」そう強く確信に変わるものでした。「先生」と呼ばれる恥ずかしさと慣れない環境の中で始まった教育実習で一番戸惑ったのは、授業を子どもたちの前で行うことでした。大学で授業案を作ったことはあったのですが、現場では通用するものではありませんでした。授業案通りに進めることに必死で、子どもたちの貴重な発言に十分に耳を傾けることができませんでした。先生方から指導して頂き「こうすればいいんだ」と気づいたりすると、“こんな授業をしたい”というように次から次へと欲がでてきました。決して満足のいく授業ができたわけではなく、また、４週間でどこまで深く付き合えたかは分かりませんが、子どもたちと一緒に学ぶことの楽しさを知ることができたことは、とても貴重な体験でした。

佐藤先生とゼミ仲間と

学業以外にも、４年間の大学生活では時間をかけて友情をはぐくむことができました。初めは気の合う仲間であったのが、毎日の他愛のない会話、時には夜遅くまで悩みや将来について語り合ったりするうちに、何ものにも代えがたい存在となりました。中でも、２年間共に学んできた佐藤ゼミでは、同じ目標に向かって一緒に勉強を取り組んだりと沢山の刺激を貰いました。

この先、私の前に広がっている世界を考えると、不安に身が竦み、震えるような思いがする一方で、期待に胸が膨らみわくわくするような思いもします。大学で学んだこと、仲間とすごしたことを胸に社会人として夢を追い続けたいと思います。

この４年間で私を成長させてくれた、先生方、友人たち、そして家族に感謝します。

恵まれた環境に感謝

国文学科４年
廣田絵未

都留を旅立とうとしている今、大学生活を振り返って強く感じるのは、自分が本当に恵まれた環境の中にいたということです。

大学４年間、自分の好きなことを学べるということは、とても有難いことだと思います。中世ゼミの一員として、佐藤先生の温かい御指導のもと、素晴らしい仲間たちと共に文学を学ぶことができた日々は、大学生活の中でも特に貴重な時間でした。自分なりの課題を見つけ、皆で共有することによって、自分にはない新たな視点に気付くことができるのはゼミで学ぶ楽しみの一つでした。さらに中世文学研究会では、ゼミとはまた違った少人数の和やかな雰囲気の中、疑問に思ったことや感じたことを話し合い、純粋に文学を楽しむことの素晴らしさを改めて実感できました。この４年間文学を勉強したことによって培った、資料を収集しまとめる力や、物事を多角的に捉える力は、社会に出てからもきっと活かせる力だと思います。都留で学んだことを大切にしながら、これからの日々を過ごしていきたいです。

旅立つことば　卒業生から

「新たな旅立ちへ」

英文学科４年
柚木奈津美

この４年間は本当にあっという間でしたが、１日１日がとても充実していたように思います。初めての一人暮らしを経験し、学業だけでなく多くのことを学んだ場所がこの都留で本当に良かったと、改めて感じています。

大学生活を振り返って、まず力を入れたと言えることはコンビニエンスストアでのアルバイトです。１年の夏から卒業する直前までの間、自分の生活の一部でもありました。ただお客さまに対して商品を販売するだけでなく、相手がご年配の方なのか、それとも小さい子どもなのかによって接し方も異なります。誰に対しても気持ちの良い応対を心掛け、心配りができるようになったのは、大きな収穫であると実感しています。また接客だけではなく、数ある業務を限られた時間の中で確実にこなしていく臨機応変さというものも、少しは身につけられたのではないかと思います。

もう１つ挙げるとすれば、西出先生のご指導の下、二年間のゼミに一生懸命になれたことです。コーパスの作成や言語情報処理は、英語という言語を違った角度から研究する面白さを教えてくれました。また、パワーポイントを用いたプレゼンなどを繰り返し経験したこの二年間で、人前で発表する力を随分とつけることができました。ゼミで取り上げる事柄に対してだけでなく、自分自身に足りないものを指摘し、叱責して頂けたのも西出ゼミの一員であったが故です。私が教育系の企業へ就職を希望していると話した折には、卒業論文の題材に使用した子供向け図書を紹介して下さるなど、きめ細やかなサポートに心から感謝しています。

卒論発表会の前に

都留で過ごした４年間で、多くの人々とつながることが出来ました。全国各地から集まった学友、ゼミやアルバイトの仲間、カナダでの語学研修を共に頑張った仲間・ホームステイ先の家族、吹奏楽団（学外）のメンバー…。その全てが私にとって大切な宝物です。親元を離れることで改めて「家族のありがたさ、温かさ」を感じることもできました。

卒業後、春からは新たな土地での生活が始まります。まだ期待よりも不安の方が大きいですが、いつも感謝の気持ちと自分らしさを忘れず、社会人としてまた少しずつ成長していきたいです。きっと、都留での様々な経験が次へ進む大きな原動力になるはずです。

お世話になった全ての方へ、４年間本当にありがとうございました。

また、大学生活では人との出会いにも恵まれました。友人をはじめ、尊敬する先輩や後輩など、沢山の人に出会えたおかげで充実した日々を送ることができ、とても感謝しています。様々な人が支え、励ましてくれたからこそ今の私がいます。卒業するのは寂しいですが、都留で出会えた方々は、大学４年間はもちろん、都留を離れてからも私の心の支えです。

中世ゼミのみなさん

また、４年間都留で頑張ることを応援してくれた家族にも改めて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

この４年間様々なことがありましたが、今は都留に来てよかったという思いでいっぱいです。都留に来たから学べたこと、都留に来たから出会えた人、私に多くのことを与えてくれたこの環境に心から感謝しています。そして、これからは受け取るばかりでなく、誰かに何かを与えられる人間になれるよう、社会人としてさらに努力していきたいです。４年間本当にありがとうございました。

旅立つことば　卒業生から

卒業への「実感」

社会学科
現代社会専攻４年
知念浩生

大学生活は、未来に「生きる」時間であったと感じる。気の置けない友人、社会へのより強い興味関心など多くの「財産」を得ることができたのは密度の濃い４年間だったからに他ならない。その上で貴重な「実感」がある。例えば、些細なことだが、自分が多くの人に保護されていることに、これまで非常に無自覚無関心であったことを知るという実感である。また私はマンドリンクラブに所属し、部員のメンバーとひとつの演奏を毎年作り上げてきたが、そこでは「対面的」なチカラの大切さ、向き合う大切さを実感した。その意味で、４年目に経験した教育実習や就職活動において強く生きる経験であった。また、人と何かを作り上げる協働の喜びを実感したのも生活の大半を占めた部活動の経験があったからである。

加えて都留市のインターンシップと、ミュージアム都留での博物館実習において「都留」を知るということの喜びもひとつの実感である。はじめこの地に来たときはその魅力を感じ得なかったが、都留市に深く関わりを持つ市の職員の方々や、市民の方との触れ合いを通し、自分の将来に大きく接点を持ちうる決断へと繋げることができたことは幸いである。そして何よりも所属する「憲法」ゼミは社会への関心の喚起と、学びの実感があり、この大学における最大の収穫と考える。とりわけ横田先生から、ともに学ぶゼミ生から得る刺激は何ものにも代え難く、今までは非常にか細かった自己の学びに対する欲求の「根」を太く成長させていただいたように考えるのである。

自分が多くの点で「未熟」であることを実感することは多々ある。しかしながら社会に出てからさらに多くのことを学び経験し、人に出会いたいという願望を強くしたのはこの大学生活において自分が学ぶことの喜びや、人と関わっていく意義を見出せたからである。このような都留で得た多くの「実感」を胸に、未来へとその足を踏み出し、歩んでいくなかでさらに多く得ていくであろう「実感」を大切にしていきたい。

一番左の細いのが私

旅立ちのことば

社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻４年
畑中健志

冬の厳しい寒さも峠を越え、ようやく春の兆しを感じる季節となりました。今春、私はこの地を旅立ちます。この都留で得た『出会い』、『学び』、『希望』を私は忘れることはありません。

４年間の大学生活で私は公害病ツアーや子どもキャンプ、学童保育など、自分の行動力を活かしてさまざまな経験してきました。その中で私自身が熱心に取り組んできたことは、東桂保育園、東桂小学校、都留文科大学が連携して行っている「鹿留ふれあいの森」です。２年生の頃から参加し、子どもの自然体験活動について学んできました。特に、子どもと共に活動するときにはネイチャーゲームを取り入れ、試行錯誤を重ねてきました。それはこの森が子どもたちにとってよい場所となるように根気強く携わっている教職員や保護者のみなさんの姿勢から学ぶことができました。

また、このような活動は「教師」という仕事に対する私の思いを強くさせたとともに、就職活動をする上で私の軸となりました。もちろん、大学における先生方の手厚いサ

旅立つことば　卒業生から

大学生活を振り返って

比較文化学科４年
林友理恵

都留へ来て４年の月日が経った。入学時はどんな人たちに出会えるのか、どんな生活をおくることになるのか、胸が期待でいっぱいだった。私が比較文化学科に入って、何より良かったと思えたことは、フィールドワークを利用してアウシュビッツ強制収容所へ行けたことと、一か月と短い間ではあったが中国へ語学留学に行けたことだ。授業の一環として外国へ赴くことで、観光だけでは知り得ない知識を得ることができた。この体験は絶対に忘れない。今、大学生活を振り返ってみると、私の生活はサークル活動一色だった。モダンダンスサークルに入り、ステージの気持ちよさを初めて体験した。成功することで得られる達成感で、練習の辛さは一気に吹き飛ばされてしまった。日々の活動の中からは、とてもたくさんの事を学んだ。自分たちでダンスを作り上げることの難しさや、互いに協力すること・情報を共有することの大切さ、オンとオフの切り替えなど、知識としてわかっていても実際にできるかどうかは違うのだな、と感じ、実践することの難しさが身に染みた。今では完璧だと言いたいが、まだまだ未熟な私たちではある。しかし、４年の間に確実に成長してきたことは自信を持って言うことができる。サークルに入る時は同じ学科の同期がいないことがとても不安だったけれど、思い切って入って本当に良かった。最初は上手くいかないことも多かったけれど、４年間共に成長し、今ではかけがえのない仲間だ。都留でたくさんの人と出会い、世の中には本当にいろいろな人がいるのだと気付いた。自分の価値観がどれだけ凝り固まったものかに気付かされ、反省する毎日だった。これに気付かせてくれた友人たちには本当に感謝している。サークルで出会った人も、大学生活で出会った人も、アルバイト先で出会った人も、みんな素敵な人ばかりだった。この出会いを大切にし、４年間で学んだことを忘れずに、これからの社会人生活にしっかりと活かしていきたいと思う。

学内発表会後に４年生集合

ポートなども、私にとって力強い後押しとなりました。親身に相談にのってくださり、模擬授業や面接の練習などにも協力いただいたおかげで、無事に希望通り採用試験に合格することができました。

最後にいつも温かく見守り、よき理解者として応援し続けてくれた家族、さまざまな角度から物事を考え、判断できる力をつけてくださった先生方、安心してキャンパスライフを送る環境づくりをして下さった職員の方々に感謝したいと思います。この大学で学んだことを胸に刻み、これからの人生に活かせるよう一生懸命頑張りたいと思います。

どこにいても第二の故郷都留を愛し、都留文科大学の今後の発展をお祈りしています。今日までありがとうございました。

旅立つことば　専攻科・修了生から

ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために

文学専攻科
教育学専攻
伊東一磨

専攻科で過ごしたこの１年間はあっという間でしたが、本当に充実した日々でした。専攻科に進学して一番感じたことは、同じ志をもつ仲間の大切さです。私を入れて９人という専攻科のメンバーは、個性豊かでいつも笑顔があふれ、全員が教員採用試験合格という同じ志を持っていました。そんな“同志”と過ごす毎日は、刺激に満ち、自分を成長させてくれるものでした。試験対策では、毎日みんなで夜遅くまで学校に残って勉強し、面接や小論文対策に本気で取り組み、全員で切磋琢磨しながら力をつけることができました。専攻科には、お互いのことを真剣に、本気になって考えるという学びの姿がありました。この仲間たちと本気になって取り組んだからこそ、充実した今があるのだと思います。

私は専攻科に進学するにあたって、「なんでもやってみよう」という目標を立てました。学生生活最後の１年間を有効に使い、とことん学び、とことん遊び、様々な経験を積み重ねたいと考えました。学校ボランティアに参加し、自身の興味のある分野で研究を深め、研究論文も納得のいくものにすることができました。また、日本一周旅行をはじめ富士登山、東北被災地訪問や研究会、論文執筆のための聞き取りなど、日本全国に足を運び、様々なものを見て、様々な人と出会いました。今では人との出会いとそこから生まれるつながりを大切にしていきたいと強く思っています。

専攻科の研究室にて

自分の世界を広げてくれたのは、都留で出会った先生や仲間とのつながりです。春からは、故郷で教員としての第一歩を踏み出します。これからもこの大学でできたつながりを大切にし、新たなつながりをつくっていきたいと思います。そして、「なんでもやってみよう」という気持ちを忘れず、何事も楽しみ、前向きに取り組んでいきます。

最後になりますが、家族をはじめ、大学の先生方、専攻科の仲間、部活動の仲間など、私はたくさんのあたたかい人たちに支えられ、ここまでくることができました。心から感謝しています。本当にありがとうございました。

第二の故郷、都留に向けて

大学院文学研究科
国文学専攻
岡田祐輔

私は愛媛の海と山に挟まれた地で育ち、一年間の東京生活を経て、都留で学ぶことになりました。にぎやかでざわざわした東京での生活もあって、故郷の雰囲気が恋しく、静かな場所で落着いて勉強したいと強く思っていました。この六年間には「これをやるんだ！」とがむしゃらになったり、何をしたらよいのか分からなくなって停滞した時期もありました。今思うと、読書量にしても常に本を手にしていた亡き祖父は勿論のこと、「高校時代に文学全集や民話全集などは読みつくした」という母にすらはるかに及ばないのです。でも私が出会ったことのないタイプの人やその人たちの可能性にふれることで、嘗ての自分を超え、分かりあえる幅を広げ、自分自身優しくなれたと思えます。そして研究の中心においた近代文学を学んだことも非常に大きい意味を持っていました。私にとって、文学を学ぶことは、他と己への深い興味を持つことであり、己を超えることであり、それは即物的な優しさに限らない本質的な優しさにも繋がるもので

旅立つことば　大学院修了生から

都留での６年間を振り返って思うこと

社会学地域
社会研究専攻
雨宮舞子

私にとって、都留文科大学で過ごした６年間はあっという間でした。６年前、大学に入学した時は不安な気持ちでいっぱいでしたが、今は都留文科大学で過ごすことができてよかったと思っています。

私が大学に通う中で最も心に残ったことは、学ぶことの面白さを感じることができたことです。大学での学びは、社会学科だったということもあり、新聞に載っているような社会問題について、それが起こる背景や原因は何かを考えることを通して、物事を深く見つめようとするものであると思います。大学院への進学を決めたのも、そのような学びをもう少し深めてみたいと思ったからです。修士論文の作成にあたっては、先生のアドバイスをもとに多くの文献を読み、整理し、それを自分なりに考えまとめる作業は大変でした。しかし、一つ一つのことを関連させ、そのつながりを発見することで視野が広がったときはとてもうれしく、また頑張ろうという気持ちになりました。６年間の学びを通して、物事の本質は何なのかを考えることの大切さなど、自分自身の考え方を構築していくうえでその基盤となるものを得ることができたと思っています。

院生室にて　院生みんなで撮影

また、学校の先生になることを目指して大学に入学した私にとって、教育実習をはじめ、アルバイトや学童保育での経験はとても貴重なものとなりました。そこで様々な人々と出会い、関わっていくなかでたくさんのことを教えていただきました。例えば、子どもたちの前で授業をしたり、コミュニケーションをとることの難しさを実感しました。しかし他方で、一緒に遊んだり、おしゃべりをしたりすることはとても楽しく、気持ちが伝わったと思えたときは本当に嬉しかったです。

６年間、悩んだことも嬉しかったことも色々ありましたが、今私の心にあるのは、これから先私なりに一歩ずつ歩いていこうという気持ちです。学生生活を支えてくれた家族や指導してくださった先生、出会えた友人に心から感謝しています。

した。

「母さん、勉強が楽しい。知らんかったことが沢山ある。」大学生活の中頃、私が母に告げた言葉です。大学院ではさらに未知なる世界が繰り広げられ、自分の小ささと脈々と続く人間の知恵の大きさを感じました。

私は来年度からは教員として新たな一歩を踏み出します。六年間はその長い準備だったかもしれません。それに見合う強固な踏み台となっています。文学を学び､己に挫折し､迷いに満ちた私をそれでもなお導いて下さった担当の先生には、自分の不甲斐なさを恥じるとともに、感謝の気持ちで一杯です。文学のいろはを教えてくださった諸先生、合唱や詩作を通して関わった方々、二年早く都留を去った学友、散歩の折々しみじみ味わえた自然、そして私にこのような出会いを与えてくれた都留とこのキャンパスに心からありがとうといいたい。

二年間共に研究室を占有した戦友達。ありがとう

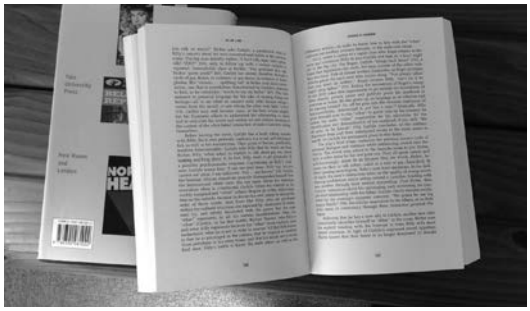
旅立つことば　専攻科・修了生から

人生を変える発見の日々

英語英米文学専攻
久保田琴乃

私は山梨県の現職教員の国内留学として都留文科大学の大学院で２年間学ばせて頂きました。この２年間は私にとって発見と吸収の日々でした。現在は高等学校で英語の教員をしていますが、もともとは都留文科大学の国文学科出身であり、英語の文献を研究していくには明らかな力不足を感じていました。大学院の授業では本当に基本的なことを繰り返し教えて頂き先生方のお手を煩わせてしまうことも多かったと思います。毎回の授業は私にとっては非常に大変で、課題や予習は文字通り寝る間もないくらい時間がかかり、よく知恵熱が出ました。日頃仕事で自分が受け持っている生徒の気持ちがよく分かる気がしました。それでも授業で得たことはそれまで私が知らなかったことばかりで、言語や教育のことだけでなく、社会学や哲学、美術にわたるまで学ぶことができました。自分がそれまでいかに無知であったかを知ることができ、考え方が１８０°変わったこともありました。いまここで学ばなければ一生知らなかったのだろうかと思うとゾッとすることや、もっと早く知っておけば今まで違った考え方ができただろうに、と思うこともあり、いま大学院で学ぶ機会が持てて本当に良かったと感じています。

同じ院生の仲間は年齢も経歴も様々で、みな個性的でおもしろく、話しをしていて刺激を受けることが多くありました。２年目は職場に戻り働きながら修論を書いたり授業を受けたりする日々でしたが、大学院の様子や授業についていつも連絡をくれました。みんなに親切にしてもらい本当に感謝しています。



格闘した文献たち

最後に、修論指導でご指導を頂いた竹島先生にはいつもご迷惑とご心配をお掛けしました。また、授業でお世話になった先生方をはじめ、大学院の先生方、お名前をあげるときりがありませんがお一人お一人に本当に感謝しています。ありがとうございました。

また、２年目に仕事で大学院に行く機会が少なくなった際も、手続きや書類提出等がスムーズに行えるようにご配慮頂いた大学の事務局の方々や、英文科事務局の高橋さん、本当にありがとうございました。

多くの人に支えられながら大学院で学ぶことができたと感じています。そのことに感謝しながら、この２年間で学んだことを今後の教員生活で生かしていきたいと思っています。

人生これからの旅を楽しみに

大学院文学研究科
比較文化専攻
薛　玉珊

2009年６月、私は中国の南京師範大学大学院歴史専攻を卒業し、日本へ留学することを決めました。その頃は、「日本留学という旅」が私の人生に何をもたらしてくれるだろうかと楽しみにしていました。

10月、私は笠原先生のおかげで、都留文科大学の研究生として無事に都留に来ることができました。大学ではすぐに日本人の友達が出来たので、言葉が殆どわからなかった私にも寂しさをあまり感じませんでした。また、大学院の授業も最初は殆ど聞き取れませんでしたが、先生方がいつも熱心にやさしく内容を説明してくださったおかげで、比較的早い段階でついて行けるようになりました。このように、一年間の留学生活を送ったある日、自分の日本語を検定したいという思いが湧いてきました。それで、山梨県の留学生スピーチコンテストに参加しました。一回目は入賞できませんでした。私は「大丈夫、来年絶対入賞するぞ」と自分を励ましたが、入賞できなかった理由を真剣に考えていませんでした。翌年、再びそのスピーチコンテストに参加しましたが、結果は前と同じく、入賞できませんでした（笑）。この結果を認めるまでは、辛かったです。しかし、

旅立つことば　大学院修了生から

文大、これからもよろしく！！

臨床教育実践学専攻
笠井正宏

私は都留市在住なので、子どもの頃から文大は身近な存在だった。教育実習生のお姉さんは、もちろん文大生だった。休みの日に悪ガキ数名が、四畳半一間の狭い部屋に遊びに行って、こたつで足を温めながら話したことを今でも覚えている。子ども祭りも楽しかった。お兄さんに針金でローマ字の名前を作ってもらった。せっかく作ってもらったのにすぐに壊してしまい、ちょっと落ち込んだ。このように身近な文大だったが、高校生になった私は、そこに魅力を感じず、県外の大学に入学することになった。

山梨県の教師となり、文大はまた身近な存在になった。現職の教員講座に参加したり、留学生のホストファミリーになったり、Ｓゼミの学生と鹿留でキャンプをしたり、研究授業の前には、大学の図書館で文献を探したりした。

院生室で仲間たちと

教師として十数年が過ぎ、自分の実践から身につけてきたものと目の前にいる子どもとの間に何かズレのようなものを感じ、自分の実践をふり返りその質を問い直すことが必要になった。私は、平成22年４月より２年間、県教育委員会の内地留学生として本大学院で学ぶ機会を得た。

授業はどれもが刺激的だった。子どもを軸とした実践的、総合的、本質的な内容と、それ以上に魅力的な先生方からの指導で、自分のこれまでの実践がどんな意味をもっていたのかをとらえることができ、これからの方向性が見えてきた。また、授業だけでなく「地域カンファレンス」や「公開ゼミ」、学会や研究会、調査への参加も私の視野を広げてくれた。

私はこれからも都留に生き、教師として歩んでいくだろう。そして機会があるごとに、私は文大に身を寄せ、支えてもらうだろう。だから、旅立つというよりも「これからもよろしく」という方が合っているように思う。

最後に、このような貴重な学びができたのも、一緒に学んできた仲間たちのおかげだと思っている。みんな、本当にありがとう。

今振りかえると、二回も入賞出来なかったことは、本当にいいことでした。なぜなら、二回目の失敗から、やっと自分の日本語力の不足及び表現の下手さを真面目に認識・考えることができるようになったからです。

その頃から、私は何回も講演に挑戦しました。おかげで自分の考えを相手に伝えることができるようになったし、多くの人と出会うこともでき、留学生活をもっと豊かにすることができました。「失敗は成功のもと」という諺があるように、失敗したからこそ、私は成長できたわけです。日本に来て二年間、思い出をたくさんいただきました。留学という旅の「苦と楽」を味わいながら、成長しています。これらの思い出は、私にとってかけがえのない宝物です。これから、社会人としての生活が待っており、学生時代よりも様々な困難と挑戦に出会わなければなりません。私はこれらを人生の試練だと思い、乗り越えて行きたいです。

留学生送別会にて

今年は龍年で、龍は「経験」を食べて成長していると言われます。卒業生の私たちはこの二年間、ある程度の「経験」を食べてきたから、きっと龍のようにこれからの人生の旅へ向かって、大きく羽ばたいていけると信じています。

卒業論文・研究論文・修士論文一覧

学部卒業生、文学専攻科、大学院研究科修了生の卒業論文、研究論文、修士論文の全タイトルを掲載します。ただし、今回掲載する内容は、今年度提出された卒業論文等（前期卒業･修了も含む）であり、実際の卒業者・修了者とは異なる場合があります。

初等教育学科

麻場一徳ゼミ

赤木大介　男子 400 メートルハードル走におけるレースパターンとパフォーマンスの関係
石野玲央　都留文科大学男子４×100m リレーのパフォーマンスに関する研究　―他大学との比較から―
磯部奈津　都留文科大学生のスポーツの継続に関する研究　―種目別・レベル別に見る種目変更の理由とその後―
宇田峻也　中距離ランナーの 800m 走における配分から考えるトレーニング方法に関する一考察
柄本剛宏　運動経験が身長の伸びに及ぼす影響　―都留文科大学生の場合―
小林悠香　100m ハードル走と走幅跳を専門とする大学生女子陸上競技選手Ｙ・Ｋにおける 10 年間の記録の変化についての一考察
佐々木翔太　男子 100m 走におけるリアクションタイムがパフォーマンスに及ぼす影響
鈴木千夏　陸上競技の種目別にみる性格特性
高須知香梨　女子４×100m リレーにおける各区間のタイム分析　―都留文科大学女子チームと日本代表女子チーム、各国の代表女子チームとの比較―
樋口光華　血液検査からみる栄養状態とパフォーマンスの関係　―都留文科大学陸上競技部員の場合―
横山早紀　都道府県別にみる環境が競技力に及ぼす影響　―陸上競技の場合―
吉原雅子　逆上がりの指導方法に関する研究

井坂健一郎（竹下勝雄）ゼミ

佐藤紗嘉　児童への色彩を用いたセラピーの方法
玉川聡一郎　風景画制作におけるスケッチの本質と役割について
東浜一志　街中におけるグラフィティ（落書き）のあり方の考察
福井　優　絵本の教育的効果とその利用法
宮古和樹　図画工作科における ICT を活用した授業への提言
山崎衣里　図画工作科における自由画の評価と教師の支援についての一考察　―低学年の実践例をもとに―

市原　学ゼミ

小松愛・菅原博子・永井沙也香　日本人における自己認知の歪みについて
関谷公志・三宅功起・渡邊裕也　感情と情報処理
高橋恵里・田中淳也・原みさと　感情と認知

植村憲治ゼミ

秋山拓也　導入展開部における算数教科書の比較
新井淑水　江戸時代と近代日本の算数教育の比較　―和算と洋算―
飯塚邦彦　算数的活動の必要性　―新たな活動を求めて―
稲倉彰太　教科書比較からみる日米の算数教育の違い
牛田綾香　子どもの理解度・意欲を高める授業方法について　―問題解決型授業と説明型授業などの比較・分析―
江口貴優　習熟度別少人数授業の指導法の検証　―算数理解を高めるために―
大谷啓介　算数教育における教科書の役割　―授業の中で教科書の使い方・活かし方―
澁江可南子　学習意欲を高める算数の授業　―楽しい算数とは―
奈良亜衣子　アジア諸国における算数の学習指導方法の分析及び日本との比較
古屋朋美　算数科における図形の学習領域について　―かたちの性質―

春日作太郎ゼミ

今野はるか　大学生の不適応と幼少期親子関係認知との関係性の検討　―調査と聞きとりから―
梅村周平　役割演技法を用いた自主グループによる大学生男子の対人行動の変容と幼少期兄弟関係への洞察
小野朋子　事例研究：他人の世話を焼きすぎて苦しくなる大学生女子の役割演技法による行動変容と洞察の深まり
小松和音　認められたくて安うけあいをしすぎ自己嫌悪に陥る大学生女子の対人行動の変容と人生脚本への気付き
山口皆実　当事者研究：「私なんかいらないんだ病」から対人関係が築けなくて苦しむ私を救い出す 交流分析の自主勉強会の効果の検討

卒業論文一覧・初等教育学科

後藤道夫ゼミ

大柴志織　小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育
小田はるか　生活保護の住宅保証の法律の規定と運用実態
田中葉子　児童扶養手当について
田港朝佳　都留文科大学周辺における学生アルバイトと労働法について考える
福元耕太　自然教育研究「虫たちは子どもを変える」
前島　妙　日本の貧困とセーフティネット
村井香奈実　図書館司書の非正規雇用問題と指定管理者制度
宿里奈緒　吉原における遊女の生活と処遇

坂田有紀子ゼミ

小林克次・戸羽麻美・原由紀子・松岡勇気　洪水攪乱がカジカに与える影響　―カジカが戻ってくる川を目指してⅣ―
仲田沙織・山口平和・渡辺旭子　都留市鹿留川におけるカワラナデシコの訪花昆虫相とその訪花パターン　―カワラナデシコの保全を目指してⅣ―

佐藤　隆ゼミ

織田恭平　子どもが 安心できる教室とは
越智理絵　経済と貧困格差の関わり　―子どもの貧困を教師としてどう対応するべきか―
大濱朱加　教員評価について考える
梶原　梓　子ども同士の人間関係について　―苦悩と共に幸せに生きるには―
神野由姫　学歴のイデオロギー
神田七重　学校が親・地域と共に育つために
古屋未来　教師として学びつづけていくために
細見真史　渡辺恵津子実践から見る日本の教育
丸山美樹　教師と保護者　―互いに手を取り合える関係を築くために―
前田真珠美　子どもの求める授業
三宅美紀　つながりあえる学力・授業
目黒祥平　教室で広がる子どものつながり

清水雅彦ゼミ

石井健太　比較から見るオペラとミュージカルの過去、現代、未来
加藤優樹　特別支援教育と音楽療法
坂井　歩　感情と音楽　―子どもたちが安心して表現できる学級を目指して―
佐々木沙貴　音楽が持つ力
山本彩夏　音楽の生涯学習

椙守光恵ゼミ

大泊祥子　沖縄の伝統音楽と人々との関係性　―継承という視点から考える教育との繋がり―
小田嶋愛　日本と朝鮮半島における音楽の共通性を探る　―日韓唱歌のルーツを辿って―
鎌倉　慎　学級経営における音楽の活用　―アイスブレイクに焦点を当てて―
久保美沙緒　音楽教育で伸ばす自己表現力　―音楽療法の観点から―
久米香織　ショパンの魅力を子どもたちに伝えるために　―ピアノ音楽を教材として―
櫻井彩絵　音楽でつながる子どもの心を見つめて　―音から生まれるコミュニケーション―
永田枝緒里　記憶を引き出す CM 音楽の分析的研究　―小学校教育における聴覚記憶の活用―
松山はるか　音楽がもたらす心身への影響について　―介護の現場に注目して―
渡辺彩花　音の色彩感覚を求めて　―色聴所有者スクリャービンの色彩論をもとに―
渡辺瑞穂　小学校における音楽教育の可能性　―豊かな心を育む音楽を求めて―

添田慶子ゼミ

清都千華　授業中の事故から考える体育教育についての研究
内藤はる香　健康への取り組み　―水中エクササイズについて―
藤原侑希子　都留文科大学生の性意識・性行動からみる今後の性教育の課題
前島大樹　都留文科大学サッカー部員の食生活と食意識について

高田理孝ゼミ

有賀えり沙　男脳と女脳の記憶の違い
池谷美生　ストループテストにおける干渉率と向性タイプとの関係
清美和歌子・竹下雄貴　BGM が知的作業に及ぼす影響
田中翔馬　物語スキーマ特性の分析
戸田大介　向性と一人でいられる能力との関係性
平野　大　正導・誤導情報と出来事の情動性が事後情報効果に及ぼす影響
宮入広充　教員採用試験と性格因子の関連

田中昌弥ゼミ

有竹尚太　学力を保障し得る共同体の質
高田朋未　いじめ問題から考える理想的な学級づくり
高橋明日香　「まちがい」がひらく指導の可能性
福井沙紀　特別なニーズを持つ子どもとの学級づくり　―「困っている子」を理解し支援する―

卒業論文一覧・初等教育学科

東川春菜　教育の基準を何に置くべきか　―1940 年代から現在の教育の変化に注目して―
李　明華　学校教育とは国民教育なのか　―マイノリティの視点から―

筒井潤子ゼミ

大西　翼　よい子が自分をみつけるとき
尾澤飛成　愛着の重要性　―児童養護施設の子どもとの関わりから見えてくるもの―
梶村健祐　思春期における友人関係の意味
小林菜摘　子どもが“いじめっ子”になるとき　―加害者の視点からいじめを考える―
柴田聡美　安心感を生む関係　―自分を受け入れられるということ―
栖原めぐみ　負の感情と向き合う　――一人の子どもとの関わりから見えてきたもの―
藤堂翔一　特別支援学級の必要性と役割　―二つのかかわりのなかで―
広瀬友理　“荒れる”子どものこころ　―子どもの環境から考える―
守屋優子　母娘関係と感情表現の育ち　―Aさんとの出会いを通して教師の関わりを考える―
山田愛莉咲　甘えることの大切さ　―子どもの心に与えるもの―

鶴田清司ゼミ

池谷邦章　聞くことの指導と評価
岩見一樹　PISA 型読解力を育てる国語の授業
岡田健太郎　文学教材をどのように指導するべきか　―動作化の重要性―
小野祥歩　国語教育における討論の授業
斎藤陽平　漢字の教育～漢字文化を教え育む～
崎田香穂　国語教育における演劇的活動の有効性
佐橋和貴　音読の有効性とは
鈴木雅弘　民話を用いた伝統的な言語文化の指導
花輪悠貴　伝え合う作文指導　―教科内容と教育内容の一体化を目指して―
増重由佳　国語教育における戦争児童文学研究
安河内友洋　読書指導法　―絵本の絵と原画展を利用して―
山﨑愛佳　国語教育におけるノートの有効活用とは

寺川宏之ゼミ

井川龍人　数学的パズルについての研究
木村未和　コンピュータ・ICT を活用した算数・数学教育
古賀太祐　考える力を育む算数教育
杉浦秀祐　初等・中等教育における図形領域の指導法
的場未希　野崎昭弘著「πの話」の解説
望月彰人　初等整数論　―合同式について―
弓倉大輝　用語・記号からくる算数・数学の理解の難しさについて

鳥原正敏ゼミ

足羽　佑　図画工作科における美術館・博物館の利用と連携
阿部円美　図画工作の可能性　―東日本大震災と子どもたち―
太田真紀　感性を活かす図画工作科　―自由画教育をもとに―
幸田里恵　図画工作科における陶芸体験の可能性　―益子焼を通して―
花輪祐子　造形表現の一考察　―花―
堀内　悠　教科教育指導についての一考察　―図画工作科を通して目指すこと―

中井　均ゼミ

門岡るみ・橘田美歩・由井千尋　富士川の川砂の研究　－その１－
阪井祐太・門馬健生　沖縄本島の海岸砂の研究
松下みどり・森　美咲　都留の地学教材の研究　―東桂～鹿留―

西本勝美ゼミ

安達研斗　当事者が主体となる学校づくりを目指して　―新自由主義的な教育改革の検証から―
川崎　誠　子どもが育つ居場所を目指して　―社会的自立を促す環境づくり―
北　直己　子どもみんなが楽しめるスポーツをつくる　―人と人との関係づくりから―
權田好寛　平和を考えるための学び　―平和概念の深まりと平和教育の多面化―
橋本菜美子　地域ぐるみで食育に取り組む　―学校給食で地産地消を―
山崎　瞳　心と体が元気になる活動　―農業体験がもたらす豊かさ―

箱石泰和ゼミ

植木梨香　一斉授業の可能性
鈴木太地　演劇教育の可能性
園田　茜　斉藤喜博の詩の授業を学ぶ
福﨑悠希　子どもの力を引き出す発問の原則とは何か　―斉藤喜博の実践をもとに―
山田公実　子どもが学び合える授業とは　―佐藤学の授業論―

藤本　恵ゼミ

武田寿恵　「森は生きている」の魅力を探る　―「森は生きている」が愛される理由―
中村香織　「大造じいさんとガン」の教材価値について

卒業論文一覧・初等教育学科

平岡奈巳　『ズッコケ三人組』シリーズに見る成長
村澤杏奈　辻村深月作品に見る〈子ども〉と〈大人〉
吉田恭輔　恩田陸『麦の海に沈む果実』論

森　博俊ゼミ

井上文絵　通常学級における特別支援に関する研究　―子どもたちの「つながりづくり」に焦点をあてて―
瀧波裕美　安心できる居場所としての学級づくり　―カナダで感じたことを基点にして―
中崎　潤　障害者を抱える家族の困難の物語　―青年Ａとその家族の語りから―
古谷麻里子　発達障害等のある子どもを中心とした支援的コラボレーションのあり方　―発達援助者の語りを通して―
山下彩菜　認め合える教室をつくる教師の心がけ・はたらきかけ　―子どもに自信を身に付けさせる―
吉水奈保　入院児の「内面世界」を考える　―院内学級教師の聴きとりを通して―

柳　宏ゼミ

石田　綾　都留文科大学学生の体育授業に関する意識調査　―前回調査との比較―
植草美由紀　スポーツチームのリーダーに関する研究　―高校女子バレーボール部員が求めるリーダーとは―
大脇一輝　運動学習　―フィードバックに着目した研究―
小川詩織　本学学生のスポーツ経験が社会的スキル形成に及ぼす影響についての研究
笠井舞花　ハンドボール競技における攻防能力の分析研究
岸　亜沙美　バスケットボール競技のルール変更が試合に及ぼす影響
斎藤充之・滝吉春香　バレーボール競技のレシーブ動作の分析研究　―サーブ及びスパイク―
照屋奈智　バスケットボール競技のフェイント動作の研究　―1on１の場合―
中西　渉　本学学生の運動部・運動サークル活動に対する意識調査　―引退の時期に着目して―
村山　聖　ハンドボール競技におけるゲームの分析　―攻防の時間に着目して―
柳本莉央　飛距離に着目したバッティング動作の分析研究
吉澤詩織　バレーボール競技のブロック動作の分析研究　―踏切に着目して―

山﨑隆夫ゼミ

市川早紀　自己肯定感を育てる　―今日の子どもが抱えている問題から読み解き、自己肯定感を育てるには―
大木淑江　スクールカーストを考える　―子どもが安心して自己を表出できるようにするために―
後藤友梨菜　荒れる子どもを受けとめるには　―私の出会った青年の語りから見えてくるもの―
那須雅幸　子ども理解　―学童の子ども達とのかかわりを通して―
平山雄大　発達援助専門者の子ども理解の深まりについて
細川未来　少年非行の背景と援助の在り方　―いくつかの事例から考える―
守屋孝浩　特別支援学級における学習指導と子ども理解―特別支援教師　渡辺克哉の実践の研究―
山中美穂　“困難な子”と教室　―教師の役割とは―
横山千佳　子ども一人ひとりが輝ける環境を保証するために教師が学級経営でできることとは
吉田詩惟　教育活動としての部活動の在り方　―人間的な指導を目指して―

山本安夫ゼミ

岩瀬安史・植田　諭　小学校理科教育におけるエネルギー概念の形成
今井美伶・石井将大・増田幸太郎　放射線と教育
小原早貴・三木結花　光の分光スペクトルの測定

山森美穂ゼミ

織邊詳子　東京・神奈川・山梨における地表オゾンの「週末効果」
櫻井将人　小学生が「粒子概念」を扱えるようになるための方法の考察
佐藤和馬　小学校における地域性を重視した環境教育の有効性と課題
杉山実穂　絵本や紙芝居を介して「成層圏オゾン」を伝える
高野夕貴　小学校における環境学習の現状：学ぶ側と指導側のとらえ方
高橋孝明　地球温暖化の現状に関する初等教育学科学生の意識・理解
永田沙織　小学校理科における環境教育　―体験活動を重視した持続可能な社会を形成するための教育―
三村隆仁　太陽光発電技術の現状と将来

吉住典子ゼミ

齊藤大樹　学童保育についての研究２
齊藤みか　一人暮らしの生活手引き　―キーワードは食生活①―
鈴木裕美子　一人暮らしの生活手引き　―キーワードは食生活②―
高井　亮　学童保育についての研究１

卒業論文一覧・初等教育学科

高村恵美　地産地消についての研究　―手作り豆腐キット①―
弘灰みなみ　地産地消に関する研究Ⅰ　―2011 年度レシピ集―
福田綾乃　地産地消に関する研究Ⅱ　―2011 年度レシピ集―
古田峰子　地産地消についての研究　―手作り豆腐キット②―
湯山なつき　地産地消に関する研究　―織物製品について―

卒業論文一覧・国文学科

国文学科

上代文学　鈴木武晴ゼミ

葦名麻希子　古事記上巻から見る女性像
板垣理沙　教育に生かす古事記の同性譚
遠藤拓也　建内宿禰考
加藤歩弓　上代蛇説話考
設楽なつみ　雷考
鈴木志野　記紀におけるツクヨミノミコト
手塚仁美　国譲り神話　―言葉・信仰・政治―
中村友香　山梨とコノハナノサクヤヒメ　―その信仰と文学―
新田見飛鳥　万葉集と百人一首の関係性について
林未奈美　『古事記』の神と人
間中　愛　トヨウケビメと外宮
丸山圭子　上代文学における死後世界観
水野結美　上代の人と亀
宮田なづな　『日本霊異記』における仏像
向田華奈子　万葉集の七夕歌
與那嶺愛　上代に見る「夢」の様相

中古文学　長瀬由美ゼミ

石丸奈保美　『狭衣物語』における皇女の婚姻
遠藤麻里　『狭衣物語』における人物造形　―香り描写を手がかりに―
金澤和恵　『狭衣物語』にみられる超自然的現象について
木﨑　綾　『源氏物語』における随身について
栗原利峰　『狭衣物語』の展開　―飛鳥井女君をめぐって―
島田純子　『狭衣物語』における死について
田頭敏樹　『狭衣物語』における皇統を考える
田中星乃　『狭衣物語』作中人物論　―後一条帝を中心に―
寺岡泰宗　『狭衣物語』における「ゆゆし」について
山口紗月　『狭衣物語』の音楽について
臺里佳子　『とりかへばや物語』の女君
近藤真澄　『源氏物語』末摘花論
寒河江小百合　『伊勢物語』の禁忌の恋について

中世文学　佐藤明浩ゼミ

猪股　萌　和歌における桂・楓・かつら考
大林紗季　謡曲〈定家〉論　―謡曲のモチーフとしての定家・式子内親王の人物像を中心に―
小泉美彩　『平家物語』諸本の忠度像
近　良美　〈怪談〉の変遷
廣田絵未　星を読んだ和歌
山本都久美　和歌の色彩表現について
渡邊智子　物語における茸　―『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を中心として―
山下桃代　和歌における「桃」

近世文学　楠元六男ゼミ

浦崎　茜　『悦贔屭蝦夷横領』について
大石裕子　潭北と祇空
榊間涼子　江戸時代における蝦夷
澤邉里佐　「浅茅が宿」を中心とした真間の手児奈伝説の受容
白石久美子　物語の中の源太騒動
須釜亜紗美　近世の夜明けを駆け抜けた武将蒲生氏郷
鈴木貢介　『伽婢子』「隠里」について
髙橋菜々　橘以南について
福田敦美　向井去来と一族
本多宏美　桃太郎について
柳沼　希　岸本調和の撰集活動について
米山えみ　蔦屋重三郎と吉原細見
渡邊伸一　山口素堂と『とくとくの句合』

近代文学　阿毛久芳ゼミ

五十嵐麻希　宮沢賢治「チュウリップの幻術」論
池田奈緒子　奥田英朗論　―エンターテイメントを中心に―
小幡明子　永山則夫『無知の涙』論　―無知はどこからきたものか―
島田翔吾　福永武彦「忘却の河」論
高橋沙季　小川未明論　―「野ばら」と周辺作品を中心に―
西内結香　いしいしんじ論
萩本陽亮　川端康成『片腕』論

卒業論文一覧・国文学科

近代文学　新保祐司ゼミ

市太佐知　内田百閒論　～『山東京伝』から～
小田順一　安部公房『箱男』
織田祐実　永井路子論
北畠佳菜子　夢野久作『ドグラ・マグラ』論
近藤あゆ　田澤稲舟論
佐藤安國　泉鏡花論
高橋賢太　『富嶽百景』論
武田みゆき　「赤い蝋燭と人魚」論
中野綾香　遠藤周作の『女』論
松崎友香　立身出世の舞台としての東京　―近代文学を素材として―
三井稜子　石川啄木『ローマ字日記』について
与那原鈴香　正岡子規の短歌について
渡辺　暖　夏目漱石論
大庭史子　よしもとばななの信仰と救い　～『王国』を中心として～
尾知山栄樹　名取春仙論　―近代浮世絵画家と文学―
亀石広志　中島敦論　―中島敦の考える人間の倫理とは―
左口真士　近代小説における吉原
井門里織　中島敦『文字禍』論

近代文学　田中実ゼミ

安藤稔己　堀辰雄『聖家族』考察
大川　汐　川端康成『伊豆の踊子』論　―小説『伊豆の踊子』を読む―
髙橋早紀　川端康成『片腕』論
寶田夕林　山田詠美『風葬の教室』論
藤井志穂　谷崎潤一郎『春琴抄』論
朴木友美　村上春樹『アフターダーク』論
水野友理恵　愛の最果て　―芥川龍之介『白』における世界観認識―
吉本　愛　泉鏡花『高野聖』論
鷲野紗知　太宰治『斜陽』論
渡邊由茉　宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論
若松志保　人間失格　―世間からの脱出―

近代文学　古川裕佳ゼミ

阿部友美　福永武彦『風土』論
伊藤　駿　稲垣足穂「星を売る店」論
大久保昌哉　埴谷雄高『死霊』論　―蝙蝠と鷗―
大沼志帆　円地文子『女坂』論
楠富奈央　三島由紀夫『近代能楽集―卒都婆小町―』論
田川茉莉子　安部公房『箱男』論
花岡明恵　田村俊子『木乃伊の口紅』論
松月　駿　谷崎潤一郎『颱風』論
胸組芙佐子　坂口安吾「夜長姫と耳男」論
山崎静夏　川端康成「古都」論
山下潤悟　水上勉『越前竹人形』論
渡辺美里　宮本輝『泥の河』論

国語学古代語　髙橋宏幸ゼミ

大畑由佳　伊勢物語の読み癖注記について
小山田優基　幼・若表現の差異について
片瀬絢子　叱責に関する語彙の考察
勝山友美子　接頭語の考察　―形容詞に付く「け」について―
木下佳子　飲食語彙についての研究
小林浩平　美的語彙「あてなり」「いうなり」の使用区分
佐藤詩織　山梨方言について　―『風俗画報』と市町村誌―
保阪哲哉　接尾語「み」の表現に関する研究
本多孝行　「ほのぼの」の意味と用法の変化について
堀有希子　東大寺切「三宝絵」の仮名について

国語学近代語　樋渡登・林謙太郎ゼミ

池　春奈　トーク番組におけるあいづちの研究
岩月理絵　動詞「止す」の成立と展開について　～口語文献における用例を通して～
小渡恵理子　『辞典には載っていないウチナーロ講座』における沖縄方言について
小原萌々子　商品名における音のイメージについて
菊池彩美　学校教科書における擬音語・擬態語についての研究
髙野菜帆　助数詞『つ』と『こ』の用法
佐藤眞弥　近世上方における接頭辞「ど」の意味について
堤　登萌　岡山方言を中心とした『あまのじゃく』研究について
中嶋春奈　『安愚楽鍋』にみる明治初期の位相語について
細川真奈　児童書〈怪談話〉におけるオノマトペについて
松崎純佳　野球用語における和製英語の作られ方の傾向
渡邊なぎさ　『阪急電車』における終助詞の使用について
渡辺真理子　江戸川乱歩作品におけるオノマトペ

漢文学　寺門日出男ゼミ

伊藤剛一　陶淵明の世俗観
小松　愛　唐代伝奇における「侠」について
杉村朋美　古代中国の死生観

国語教育学　牛山恵ゼミ

石切山安裕美　中学校国語科における「書くこと」の教育
市川　峻　イソップ物語と教科書　―明治期の教科書を中心に―

卒業論文一覧・国文学科

菊池裕美　詩教育における宮沢賢治　―宮沢賢治の詩の教材的価値を探る―
岸田早代　白川文字学とその教育的意義
城戸春奈　『竹取物語』研究　―難題求婚譚における作品論と教育へのアプローチ―
酒井春菜　プロレタリア教育が児童に与えた影響　―綴方を中心に―
清水佑一　中等教育におけるコミュニケーション能力の育成
高橋　望　文集『こだま』における中学生の作文作品についての考察
峠　麻衣　『イソップ寓話』における教材「うさぎとかめ」研究
中元麻奈　『山月記』研究
奈良田彩　『おにたのぼうし』論
藤崎礼花　「やまなし」の作品論―授業実践記録をもとに「やまなし」の作品論に迫る―
皆川沙織　『おくのほそ道』教材の変遷
望月愛里　国語科単元学習の歴史と実践例研究
山下真理子　児童の『話す力』を伸ばすための指導

卒業論文一覧・英文学科

英文学科

稲垣孝博ゼミ

江口景子　*Die Unendliche Geschichte* における「名付け」と言霊信仰について
都丸寛文　*The Time Machine* と 19 世紀末のイギリス
長田愛美　*Alice's Adventures in Wonderland* の魅力とキャロルの願い
川崎健太　グリム童話とペロー童話の比較
小林謙太　*Gulliver's Travels* 第三編に見る、Jonathan Swif t の時代批判
斉藤優馬　1970 年代イギリスのロックシーンに見る理想社会像
髙田誉士　*The Chronicles of Narnia* における聖書の影響力
中村　郁　『誰がために鐘は鳴る』における思想と行動
秦あゆみ　ルイス・キャロルにおける言葉の多義性
三上宏輝　トマス・モアとユートピア

今井　隆ゼミ

長田　薫　Bilingual and the Brain
―Language Lateralization in Bilinguals

大平栄子ゼミ

塘　秋歌　Myself Mona Ahmed にみるインド社会におけるヒジュラ
太田美緒　誤読され続ける原作としての Peter Pan
斉藤祐希　Adulthood を拒否するテクスト *Peter Pan* とその功罪について
鈴木よしか　*Burned Alive* にみる名誉殺人と女性の生き方
高砂　咲　*Alice's adventures in wonderland* にみるアイデンティティーの探求
綱川順子　*Grimm's Fairy Tales, Snow white* にみる継母と娘の関係性
中村龍之介　*The AO Naga Tribe of Assam*　―インドの少数民族についての包括的研究の意義
西脇　渚　*The Young Widow* にみるインドの寡婦問題について
新田つぐみ　*The God of Small Things* にみるインドのカースト差別
星　麻帆　*Water* からみるインドの寡婦の生き方
八木春香　ダウリー　現在と過去の比較
渡辺あゆみ　*Cinderella* Ⅱ・Ⅲにみるシンデレラストーリーの変遷
和田てるひ　*The Namesake* にみるインド系ディアスポラの女性の生き方

奥脇奈津美ゼミ

青島健夫　Immersion Education for the Preservation of Minority Languages and Cultures
大西　諒　小学校における英語教育の現状と問題点、その展望
小関　恵　第二言語指導におけるタスクの有効性
坂口祐紀子　異文化に見られる言語意識の相違
鈴木知子　The roles of gestures in s econd language speaking
鈴木麻友　ことばが持つ生産能力　―語形成の視点から―
鈴木友里絵　文字の起源とアルファベットの歴史
髙野祐一　The difficulty and importance of studying L2 collocation
早川景子　異文化間の翻訳・誤訳　―色彩語における認知の視点から―
古林恵美　L2 Vocabulary Learning: Effects of intentional and incidental learning
宮川貴裕　第二言語習得にみられる個人差

卒業論文一覧・英文学科

儀部直樹ゼミ

今井悠里加　アメリカにおけるギャング社会
内村友梨子　アメリカの黒人差別と人種格差の現状
小野まど佳　アメリカの映像作品と黒人
小楠直也　黒人音楽とブルースのテーマについて
小菅由紀穂　黒人霊歌に込められた想いとその背景
五反田彩那　ブラックミュージックのルーツとヒップポップ音楽の歴史
佐々夏姫　アメリカスポーツからみる黒人運動能力
神藤徹也　奴隷制度廃止後における白人主義、黒人差別
長塚雅貴　時代背景における白人と黒人の生活スタイルの違い
西村　玲　フィッツ・ジェラルドと *The Great Gatsby*
廣瀬咲子　黒人霊歌　―黒人奴隷たちのメッセージ―
本橋寿理　『アンクル・トムの小屋』を読む
守谷明日香　Amazing Grace　―奴隷解放を求めた白人たち―
米沢沙希　マヘリア・ジャクソンの生涯からみる黒人の生き方

窪田憲子ゼミ

安藤麻里　Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* 研究　―「信頼できない語り手」を通して―
伊藤大地　現代に生きる Edmund Burke の保守思想　―『フランス革命の省察』の研究―
小澤　南　エリザベス・ギャスケルの『北と南』研究
小谷　幸　『不思議の国のアリス』及び『鏡の国のアリス』に関する考察
佐藤麻美　アーサー・コナン・ドイル『緋色の研究』における推理と観察
菅田麻利恵　『ブリジット・ジョーンズの日記』研究
中原　優　Lucy M.Boston が愛したマナー・ハウス　―『Green Knowe シリーズ』研究―
前川絢菜　ギャスケルの『メアリー・バートン』における労働者たちの苦悩と愛
水口綾佳　成長しない子ども　―『Peter Pan』研究―

竹島達也ゼミ

近藤なな　Philip Kan Gotanda の劇作品における日系人の生き方と人間関係について
清水成美　社会問題が個人に与える影響：Arthur Miller の *Death of a Salesman* について
関田　愛　アーサー・ミラー『るつぼ』における一考察
田中滉一郎　*Hedwig and the Angry Inch* における一考察
田中裕亮　*Candles to The Sun*（1937）を通して見る *The Glass Menagerie*（1944）
中村悟子　フェンスをめぐって　―*Wilson* と Fences―
橋場友紀　*Long Day's Journey into Night*　―Tyrone 家にみる O'Neill 家―
原田夏希　南部作家テネシー・ウィリアムズの『地獄のオルフェウス』に関する一考察
藤岡由江　ブロードウェイ・ミュージカル *The Book of Mormon* に関する一考察
八木彩乃　アメリカの喜劇作家ニール・サイモンの作品における一考察

中地　幸ゼミ

石井千尋　*Native Son* から読み取る主人公 Bigger と女性登場人物の関係性とその役割
鈴木花甫里　マリアン・アンダーソン　―歌 / 詩に込められたメッセージ―
寺島亜紀　*Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family* における Yoshiko Uchida のアイデンティティ
苗村沙世子　自由を求めるハックの旅　―*Adventure of Huckleberry Finn* 研究―
西田　望　Maya Angelou の人生と黒人女性の生き方　―*I Know Why the Caged Bird Sings*―
水谷有希　黒人のアイデンティティーの不安定さ　―Nella Larsen の *PASSING* 研究―
宮崎万純　*Remembering Babylon* にみる白人移民と Malouf のアイデンティティ
山崎恵美　Alice Walker の *The Color Purple* におけるアイデンティティーの確立

西出公之ゼミ

井上雄一朗　イディオムとして使用される基本動詞について
佐々木亮太　H.E.Palmer の視点から見る中学校英語教育
柴田恭平　ブラウン＆レヴィンソンのポライトネス理論
林田琢雄　高校英語教科書の語彙分析
柚木奈津美　子供向け百科事典の語彙と表現　―*OXFORD Children's Encyclopedia* の場合―
藤江明清　大衆音楽に見る象徴性

浜谷　ピアソン　エロイスゼミ

池田英樹　On the Correlation Between Evaluation And Motivation
大髙明佳　The present situation about ALTs and effective ways of solving problems especially about lessons
加藤早織　What Should Teachers Do for the Action Plan to Cultivate Japanese with English Abilities
古山ひろみ　Finland's Education Methods for Japan
近藤陽介　English Education in Uganda
斉藤　浩　The Theory and Practice of Education for Futoko　―A Close Look at High Schools for Students Who Refused Their Former Schools―

卒業論文一覧・英文学科

竹本沙織　The Effect of Indian Style Teaching on Japanese Students
塚原真以子　Native and non-native: the essense of language teachers
福澤文香　English as a second language -Common mistakes that non-native speakers would make
牧田直也　Bilingual Education:Immersion program in Japan
守屋元気　Motivating Students to Study a Second Language

福島佐江子ゼミ

新井　静　ポライトネスと配慮表現に関する一考察
埴岡浩也　気配りに関する一考察
杉本恵理　間接発話行為とポライトネスの関係性
鈴木　悠　二言語使用と言語切り替え
滝澤　陽　Pragmatic failure and implications for English teaching
玉井裕美　携帯メールにおけるポライトネス
谷津倉愛　異文化におけるポライトネスに関する一考察
山田瑞穂　日本人英語学習者による依頼表現
山田理奈　ポライトネスと察しに関する一考察
渡辺美乃理　ポライトネスと英語教育に関する一考察
渡辺　麗　ポライトネス理論の変遷

三浦幸子ゼミ

安部智秀　Analyzing Prospective English Teachers' Use of Communication Strategies: Focusing on English Constructions in Compensatory Strategies
淡路侑太　A Consideration of Goals and Objectives for English Education in Japan: A Historical look at Junior High School Instruction
大谷晴香　Challenges in Teaching Cross-Cultural Understanding in Junior High Schools
風間桃香　Exploring Effective Ways of Teaching and Learning Polysemy
金子由佳里　Incidental Vocabulary Learning through English Songs
榊原知実　A Consideration of Applying Focus on Form to Junior High School Instruction in Japan
佐藤知尋　Effects of Code-Switching on L2 Classroom Instruction
佐藤陽一　Exploring University Students' Perceptions of Using Strategies in L2 Reading
鈴木和恵　Guessing the Meaning of Unknown Words as a Reading Strategy: What should we do when there are some unknown words in a text?
鈴木美帆　Exploring Listening Tests: Achievement Tests for Junior High School Students
竹内哲平　Effects of Background Knowledge on L2 Reading Comprehension
長友翔子　An Analysis of an Expert Teacher's Linguistic and Conversational Adjustment in L2 Classroom Instruction
藤枝さちか　Japanese Learners' Use of Strategies in Listening in Different Environments
福嶋春代　A Study of Error Analysis: Focusing on the Relation between Proficiency of Japanese Learners of English and Transfer Errors
松永友香　An Analysis of a Japanese English Teacher's Use of Oral Corrective Feedback in L2 Classroom Interaction
森本麻美　Effects of Corrective Feedback on L2 Writing Accuracy

鷲　直仁ゼミ

薄井友美　イギリスのファッションと音楽　―ミニスカートからパンクまで
及川　愛　イギリスにおけるゴースト　―日本の幽霊・妖怪との比較―
大畑未央　ウィリアム・ホガースの作品にみる 18 世紀のイギリス社会
小野内淳　「千と千尋の神隠し」からみる日本のアニメ
勝野恵美　イギリスの教育制度
小嶋里奈　国内外におけるインターネット広告の動向について
佐藤ゆう子　オスカー・ワイルドの『サロメ』
津布久香奈　風景の発見から誕生した湖水地方
濱口　萌　現代の日英の酒文化比較
松浦　茜　Winnie the pooh に関する一考察

卒業論文一覧・社会学科

社会学科

現代社会専攻

現代社会論ゼミ（指導教員：進藤　兵）

秋山英里奈　現代の若者と友だち　―人間関係は希薄化しているのか―
大室陽香　学力格差と格差の再生産について　―格差を乗り越えるために学校が果たせる役割とは―
小倉明里　犯罪の解釈を巡る社会学
北隅麗奈　豊かさの社会学　―真の豊かな社会実現のため現在の改善点を考察する―
斎藤　聡　キャリア教育の意義　―求められるキャリア教育の方向性とは―
佐藤知美　東日本大震災の津波被害からの住宅再建とまちの復興　―政府・自治体の対応とその課題を中心として―
櫻井崇裕　人口減少社会におけるにほんの展望
砂川光太郎　基地問題をめぐる日米関係　―沖縄のケース・スタディ―
松田秀美　日本の自動車産業　―日本の自動車産業はこれからどうなるのか―
水野祐樹　子どもの貧困と闘う学校教育　―低所得層、貧困層の子どもに対する学校教育制度と教育実践を中心として―
皆川小波　フェアトレードの普及について　―コーヒーを事例にしながら―
船本佳裕　日本の社会保障政策の展望　―機能する公的年金システムとその財源を事例として―
若園育子　子育て支援の在り方　―保育園・幼稚園制度、そして「新システム」についての調査研究』

生涯学習論ゼミ（指導教員：畑　潤）

井口奈緒子　防災教育についての考察　―中越地震の記録から―
岩下瑞枝　現代の生と社会システムへの一考察　―若者の生きづらさから見る現代日本の様相―
小河照幸　学童保育の役割とこれからの展望
木田萌恵　若年者雇用とキャリア教育　―現在求められるキャリア教育とは―
工藤明日香　定時制のいまをみつめる　―とある生徒の言葉―
杉山慎吾　本の変遷と公共図書館　―電子化と都留市立図書館―
菅原　静　小学校教育を考える　―キャリア教育の必要性―
手登根佑子　占領期沖縄と教育に関する考察　―沖縄という地域における教育の本質について―
戸澤真里恵　山梨県甲府市の学校教育の現在に至るまでの変遷　―戦中・戦後に焦点を当てて―
原　千佳　子どもの自尊感情を見つめて　―自尊感情低下の背景と教師の役割についての考察―
原　誠　社会的な教育における【罰】　―より広義の視点で見る【体罰】―
平野真世　若者たちの孤独感　―グループワークによる生きがいと自己の発見―
門村未和子　親子コミュニケーションと相互理解　―よりよい精神成長のために―

日本経済論ゼミ（指導教員：村上　研一）

石子恵奈　高齢者の就業問題　―個人・企業・社会の三つの視点から考える―
小俣　僚　たばこ産業の展望　―分煙化、禁煙国へ―
鎌田修全　平地農業における「共生農業システム」の展開とその展望
酒井佳世子　長野県北信地域の温泉観光の現状と課題　―温泉観光を通じた経済活性化に向けて―
佐野久美子　現代社会における女性の多様な働き方について　―人事戦略としてのワークライフ・バランス―
鈴木未菜　原子力発電所の現状と課題　―福島第一原子力発電所と被ばく労働者を中心に―
立花優太　なぜ奄美市は第二の夕張と言われるようになったか
橋本絵霧　晩婚化のメリット・デメリット
馬場遼太郎　静岡県のプロサッカークラブと地元地域の関わり
平林歳江　キャリア教育の現状と課題　―地域とつながるキャリア教育―
福田沙織　無縁社会　―独りでも安心して生きることの出来る社会、老いることのできる社会とは―
松尾龍之介　日本の教育について　―教育格差と経済格差を中心に―
山根亜弓　M＆Aの効果　―従業員への影響―

社会哲学ゼミ（指導教員：黒崎　剛）

小林潤哉　テレビゲームにおける自我形成
高鍋剛志　「〔自己である〕とはどういうことか」―自己の概念をめぐって―

現代史ゼミ（指導教員：菊池　信輝）

石井　匠　武士道と教育勅語について
伊都麻衣子　吉田松陰の教育
植田裕希　アニメと若者の関係史
江口宗俊　高度経済成長の教育を見る　―教育の大衆化と能力主義―
大櫛泰正　テーマパークブームの成功と失敗
小野寺あす香　加賀国における日本史上の公義の過渡期
北村優介　岩倉使節団が近代化に与えた影響
児嶋伴彦　山本五十六と日米開戦

卒業論文一覧・社会学科

近藤亮太　イメージ広告の展望　―ＣＭと他コンテンツとの境界の曖昧化による広告の娯楽コンテンツ化―
齋藤直輝　日本の食文化と「食育」普及の背景の考察
清水みな美　第二次世界大戦期の日本とドイツの教育政策の比較
野田貴生　第一次世界大戦と日本海軍

企業経営・労働とジェンダーゼミ（指導教員：野畑　真理子）

赤坂直哉　プロ野球の球団経営　－パ・リーグ－
織田菜央　福井県における性別役割分業の意識と実態
甲賀裕希　現在の共働きにおける家事育児
後藤真澄　女性のライフコース選択における理想と現実
瀬上由佳里　長時間労働とメンタルヘルス
長谷川亜耶　長時間労働の現状と課題
畠山俊也　ネットカフェ難民の貧困　―労働と生活の実態・その改善策―
宮本徹規　日本の女性労働問題
武藤大和　ひとり親家庭の就労　―保育園、幼稚園及びその他の施設における可能性考察―
森真衣子　外国人労働者の労働問題
柳澤和也　ニートの現状と課題

社会法ゼミ（指導教員：中益　陽子）

上野ひとみ　裁判員制度は何を変えたのか」
太田光輔　過労と労働組合の関わり
小野寺雄基　若年層をめぐる社会的困難について
九鬼幸司　高齢犯罪と老年院・老年法構想
小林幸一郎　ベーシック・インカムの実現可能性
斎藤美月　児童と労働
杉浦早紀　若年者の貧困　―雇用の観点から―
竹山仁人　未承認薬認可及び運用に関する現状と今後
中村智樹　日本式オランダ・モデルの導入可能性　―過労問題打破のためのワークシェアリング―
林奈津美　障害者福祉　―女性障害者の視座から―
前田依季　医療従事者の過労問題における一考察
矢田翔太郎　若年者雇用の現状分析

憲法ゼミ（指導教員：横田　力）

糸数尚美　日米安保と沖縄米軍基地問題　―沖縄現代史にみる米軍基地問題・安保体制の憲法学的考察―
北出雅也　「善き生」の追求と憲法学　―自律志向的存在である個の実現に向けて―
沢　　豊　一票の格差と議会制民主主義と憲法
知念浩生　生き方における労働と憲法学
中村圭祐　新自由主義改革と教育基本法「改正」
野瀬健太郎　新国家主義的教育改革批判　―教育の「政治からの独立を希求して」―
横田直樹　障害者自立支援法・介護保険制度と憲法

地方自治論ゼミ（指導教員：大和田一紘）

石原祥太　甲府市自治基本条例から考える情報共有の問題点と解決策
磯部賢太郎　愛知県の産業観光の発展可能性　―常滑市を事例にして―
荻原和範　編入合併の検証　―長野県長野市と豊野町の合併を事例に―
金丸李早　南アルプス市の合併、合併効果検証
久保悟史　グランドワーク三島、三島街中カフェにおけるボランティアマネジメントの提案
清水勇祐　電源立地自治体における歳入・歳出構造の検証序説
志村麻維　学校統廃合を考える　―都留市の高校を例に―
晴山寛士　平泉の世界遺産登録における短期的影響の検証と震災復興についての考察
山田　航　市町村合併が与える財政の影響　―中核市移行型合併の事例―
山本貴浩　富山市コンパクトシティの有効性と問題点
吉田孔明　東日本大震災における自治体の復興と対応　―陸前高田市を事例に―

環境・コミュニティ創造専攻

農山村再生論ゼミ（指導教員：泉　桂子）

石川あすか　茅葺き民家の保全と利活用に関する研究　―笛吹市芦川町を事例として―
島田大和　渡良瀬遊水池の環境再生　―ビオトープおよび環境教育の場としての湿地―
永井　彩　里地および里川の生物多様性に関する研究
日吉明子　野生動物保護管理における狩猟者の意義と課題に関する実証的研究
増田大地　花粉症における経済効果についての考察

地域経済論ゼミ（指導教員：千葉　立也）

石川真菜美　山梨県甲府市に見るＢ級ご当地グルメによる地域活性化
佐古真由美　徳島市の阿波おどりによる地域活性化　―中心市街地再生の試み―

都市環境設計論ゼミ（指導教員：前田　昭彦）

芦沢紘一　都留市の民衆生活と娯楽文化にはたした映画館の役割
柳沼冬樹　谷村競馬場に関する研究
山岸　良　東日本大震災時の学生たちの行動

地域社会論ゼミ（指導教員：田中　夏子）

今村　航　地域公共交通の拡充がコミュニティ創造にもたらす効果について

卒業論文一覧・社会学科

猪狩陽子　食の地域資源に着目したまちおこしの取り組み」 ―「B 級ご当地グルメ」を活用したまちおこし事例研究を通して―

遠藤　淑　被災地における住民参画による再生とまちづくり　―東日本大震災に関わるボランティア体験を踏まえたコミュニティ形成についての考察―

櫻井拓巳　住民自治組織による地域運営の可能性と課題―長野県阿智村における取組事例を中心に―

寺尾智文　林業経営を支える地域ネットワークの構築―林業組合を事例に考える―

中島小苗　町並み保存活動がもつまちづくり機能　―美濃市における歴史・伝統的資源の掘り起こしを通じて―

野崎陽子　「絆社会」に対する批判的考察　―東日本大震災後の事象を踏まえたウィーク・タイズの研究を通して―

馬場葉子　地域づくりにおける合意形成の困難と課題　―越後妻有大地の芸術祭等の事例を比較して―

松永卓也　地域活性化において人々のつながりがもたらす影響とは　―人と人がつながるとはどのようなことなのか―

横澤佳奈　NHK 連続テレビ小説・大河ドラマによる継続的地域振興の展望とは？　―ロケ地となった地域と企業の連携に関する一考察―

環境社会学ゼミ（指導教員：平林　祐子）

飯ヶ濱美央　木質バイオマス利用の現状と今後の可能性　―山梨県山梨市・岡山県真庭市を事例に―

石川　輝　都留市における公共交通　―地域公共交通実証運行を例に―

一色美里　現代日本のオーガニックコスメの使用状況と今後の普及についての考察

井出周平　富士市の景観事業とは

今井大介　地中熱利用ヒートポンプの現状とその将来性

川瀬菜摘　むら民主主義から地域民主主義への転換―CSA の可能性―

川西晶斗　リユース食器事業の環境負荷とその低減策の研究

隈本真理子　災害支援活動にみる CSR ブランディング　―LUSH JAPAN の事例から―

小松崎美耶　災害視点としてのフードバンク活動の実例　―東日本大震災以降のセカンドハーベストジャパンの活動を例に―

庄司圭佑　原子力発電の縮小に伴う自然エネルギーの現状と可能性

原島里奈　日本におけるフェアトレードの現状と課題―フェアトレード市場を拡大するために―

馬渕大夢　浜岡原子力発電所の停止によって生じる周辺地域の影響と解決策

山下成美　市立少年自然の家の老朽化問題と利用率向上についての研究

吉村南美　太陽光発電設備を利用した学校教育の現状と今後の可能性

環境教育ゼミ（指導教員：高田　研）

落合梨恵　なぜ学校給食は集団で食べるのか

川畑日史　沖縄の歴史から見たフール（豚便所）についての研究

蔵元　聡　適応指導教室の目的と機能について　―東京都の適応指導教室を事例にとって―

堤　優輝　オオムラサキセンターの環境教育　―他の昆虫館との比較研究―

李　美珍　「自然食」を中心とした若者たちの動向―安曇野における事例から―

内藤陽介　B 級グルメによる地域活性化　―甲府鳥もつ煮の事例―

新見嘉穂　どうして修学旅行でディズニーランドへ行くのか

畑中健志　幼児教育における「森のようちえん」の位置づけ　―都留市の二つの森での保育から、森での保育は園児獲得の戦略となりうるか―

日高望那　学校ビオトープは継続して利用されているか　―山梨県内の学校ビオトープを事例に―

山田尚悟　障害者雇用の現状と課題

地域環境計画ゼミ（指導教員：渡辺　豊博）

安部心太　環境保全と地域振興との共生に関わる発展的事例研究　―日本と英国における実践事例から―

石垣順子　岐阜県高山市高根町におけるコミュニティ再生への取り組みと提言　―人材登用による集落支援の観点から―

井関　萌　地域祭り継承への課題と祭りによる地域活性化の可能性への考察　―都留市の八朔祭りの大名行列から学ぶ―

牛奥祐太郎　都留市東桂学童保育と地域コミュニティの関わりについて

狩野　航　都留市における学生農業活動の継続的な地域貢献に関わる実践的考察

河井　優　三重県伊勢市のまちづくりの実態と課題を踏まえての普遍性なまちづくりについて　―NPO 法人「伊勢河崎まちづくり衆」と有限会社「伊勢福」の比較から―

鈴木紀子　都留市における地域猫活動を通しての人と野良猫が共存できるまちづくりに向けて　―横浜市磯子区の成功事例を参考にして―

土屋克志　静岡県御殿場市の水稲耕作における地域コミュニティの創造及び維持の意義

中村茉由　自然資源を活用した体験・参加型人材育成のあり方　―山梨県北杜市・都留市の事例を中心として―

卒業論文一覧・社会学科

長谷川南　環境保全と社会保障から見る持続可能性を持つ社会づくりのあり方　―環境保全と社会保障の活動事例を通した総合的な視点からの考察―

広瀬　誠　有機農業波及論　―宮崎・静岡の事例より―

水野裕紀　日本におけるアニマルセラピーの普及のあり方と人の心の元気に及ぼす影響　―山梨でのアニマルセラピー活動を例として―

望月美波　人間関係と幼少期の影響コミュニティのあり方

山口昌子　職業体験を通して地域の子どもと地域の大人をむすぶしくみづくりについて　―静岡県三島市街中カフェでの実証実験を事例として―

山下大輝　富士河口湖とイギリスを比較しての新たな観光戦略のあり方とは

卒業論文一覧・比較文化学科

比較文化学科

伊香俊哉ゼミ

諫山寿子　ホロコーストの展開

石津秀隆　東京裁判の是非について

加藤　葵　日本における原子力発電の諸問題と危険性について

後藤彩美　戦争におけるストレス

酒井留美　731 部隊の人体実験

佐藤千春　日本への原爆投下は本当に必要だったのか

末松由希菜　アドルフ・ヒトラー考―反ユダヤ主義と国民扇動

高石素直　原発は必要か

高橋那津美　ラテンアメリカ経済の発展と今後の課題

西田貴衣　日中戦争期における国民動員政策の日中比較

山下あゆみ　国連形成過程における国際関係　―大国の戦後構想と拒否権―

米山兼人　太平洋戦争下の国民生活

内山史子ゼミ

宇賀神葵　フィリピンの児童労働　―諸セクターの取り組みと児童労働問題解決についての一考察―

小林茉奈実　カンボジアの貧困に関わる教育問題とこれに対する日本の支援活動　―持続的な支援を目指して―

坂本未来　インドネシアにおけるイスラームと政治の関係　―近年のイスラーム系政党の支持率低下を受けて―

佐々木明里　2010 － 2011 年アルジェリア騒乱の歴史的要因と今日的要因

佐藤希美　国民とは何か　―パレスチナ問題の視点から―

塩澤貴司　東南アジア諸国の経済発展と ASEAN

常田結加　ビルマ・ナショナリズムの形成と展開　―ナショナリスト・エリートを中心に―

野田奈央　シンガポールの経済発展は何に起因しているのか

三田村知佳　グローバル・ツーリズムの社会経済的影響　―バリ島を事例として―

大辻千恵子ゼミ

岩間祥也　FM わぃわぃが目指す多文化放送　―神戸市長田区の事例から見るコミュニティ FM 局の役割―

飯塚厚美　『市民権の擁護者』ローザ・パークス　―『黒人』として、『女性』として

木原寛子　コンパニオンアニマルと私たち　―動物の幸せを考える―

柴田　緑　自爆者―自爆テロリストを生み出すものは何か―

柳澤麻里子　アメリカ銃社会　―多発する乱射事件に見る現状と課題―

新田絵莉子　ニーヨとブラック・ミュージック、R&B ―クロス・オーバーへの挑戦―

高橋千明　ワーキングプアの若者に対する就労支援の可能性　―『京都未来を担う人づくり推進事業』を手がかりに―

中田啓太　「民衆の王者モハメド・アリ - 不屈のブラックファイター -」

北澤莉恵　「ファーストフードの魔力　―アメリカにおける子どもをとりまく『ファスト風土化』―

金子直生　痴漢冤罪事件からみる、刑事手続きの問題点　―人権なき刑事手続き―

下代聖奈　暴力を越えて　－なぜ DV は起こってしまうのか―

田近　峻　X Japan の成功から見た、Yoshiki のロックとは　―反骨精神と大衆性の二面性―

大森一輝ゼミ

相川将宏　日本における外国語教育再考

伊東拓也　日本の芸能における笑いの諸類型

大庭史織　人種と身体能力―潜む人種主義意識

卒業論文一覧・比較文化学科

小山田絢子　「現代ルーマニアにおける社会問題　―なぜ野犬が多いのか―
木村文香　「日本人」に対するイメージ
渋谷　泉　異宗婚　―愛は宗教を超えられるか―
鈴木沙和　ひとり親家庭の現状と支援策　―日本とニュージーランドの比較―
高橋みなみ　マクドナルドは世界中で愛されているのか？
西村愛美　アメリカ文学におけるファンタジー
平塚俊茂　人種とスポーツ　―バスケットボールからみる人種―
真方美智子　国際離婚　―国際的な子の奪取問題とハーグ条約―
宮西隼人　アメリカにおけるアイルランド移民
村上周平　環境破壊と食糧危機
八重樫葵　ブラックユーモアの面白さとは

笠原十九司ゼミ

伊藤哲明　中国経済の発展と日中関係　―「反日」「反中」意識から見た日中経済とその課題―
上地基子　尖閣問題と日中の安全保障
勝又志保美　日中メディア報道の比較　―「反日デモ」「尖閣諸島問題」を事例に―
菊地美千子　外食産業における日中比較　―中国のニーズをつかむ―
北　千明　中国和諧社会の矛盾　―格差是正の実現―
志村智恵美　日豪関係の歴史に関する一考察　―アジア太平洋戦争における日本軍の虐殺を経て―
野口めぐみ　日韓の歴史教育の比較と共通教育の展望　―日本軍「慰安婦」問題から―
灰谷美保　中国女性史　―20 世紀から現代―
林　　蘭　中国の農業事情について　―13 億人の食の問題―
本多樹心　ベトナム戦争と学生運動の高揚
増田奈津希　日韓国交正常化がもたらした日韓関係
渡辺勇太　中国の経済事情　―発展とその問題点―

岸　清香ゼミ

石川美佳　団地におけるコミュニティ創出　―取手アートプロジェクト（TAP）を事例にして―
大林　聖　「行動する保守」を標榜する若者たち　―「不安」を転嫁する排外ナショナリズム運動―
大室直人　アーティストはいかに育つのか　―大阪アーツアポリアのレジデンス事業を事例に―
小野寺美沙　戦後日本における姉妹都市提携と青少年交流　―岩手県・金ヶ崎町の国際理解教育を手がかりに―
菊池めぐみ　消費される東ドイツ文化　―「国民的和解」をもたらした『グッバイ、レーニン！』―
照屋碧乃　巡礼の観光化　―1990 年代「癒し」ブームによる四国歩き遍路の復活―
天間彩乃　絵本を親子にひらく　―岩手県花巻市における「ブックスタート」活動を事例に―
戸田千尋　「抑圧されず、差別されない」　―不妊自助グループ「フィンレージの会」が示した道―
外崎里子　広告の中の近代女性像　―「自由」を夢見させた資生堂のモダンガール―
松井裕也　アートによる地域活性化　―「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」を事例にして―

重冨恵子ゼミ

浅井絵里奈　四万十川流域全体の環境評価の取組　―ルネッサンス協議会とアドバイザー会議を中心に―
大場康弘　中学校社会科教科書におけるアイヌに関する記述の考察　―異文化理解の観点から―
佐々木真也　データの作為性に対するリテラシー教育
重野佐依　景観まちづくりと住民参加に関する一考察
武岡　彩　外国人児童生徒教育における学校の支援体制　―教員の視点から―
涌坂知晶　知床にとってのエコツーリズム　―知床エコツーリズム推進協議会をめぐって―
渡邉あゆみ　日本の難民支援の実態　―非政府組織の支援からみる根本的問題―

鳥居明雄ゼミ

石山大地　現代社会における日本人の危機と今後
上田　望　日本におけるラスタ文化とレゲエの展開
北島翔子　ゲームセンターから生まれ育つ人気キャラ
黒羽宗俊　現代日本文化論　バンドについて
佐藤雄貴　恩田陸『月の裏側』論
鈴木彩那　初恋病は乗り越えられるか　― 3.11 震災後の邦画ラブコメディ―
高松純也　仮面ライダー誕生から現代まで、異質ライダーの謎を紐解く
中西智大　マヤ文明からみる 2012 年終末論
西塚ちひろ　住まいとハレとケの関わり
水野大地　夜に口笛を吹けば　―夜笛俗信の研究―
山本彩美　現代に生きる新選組　―それぞれの新選組像―
和知亜耶奈　世界遺産アンコール遺跡　―修復と日本の関わり―

福田ゼミ

長澤知子　ブラジルの教育制度　―経済格差から見る教育―
長屋七恵　「学生さん」と呼ばれる日本の大学生さん　―今後本当に必要とされる学生とは？―
草野功揮　生きるためのリテラシー　―マジョリティとマイノリティ―

卒業論文一覧・比較文化学科

小池あかね　日本における北欧企業・北欧スタイルの魅力
近藤恵未　デンマークに学ぶ人間の幸福とは
竹之下洋一　スウェーデンの原子力政策
田中修平　フィンランドの小学校と日本の小学校の英語教育の比較
渡辺喬巳　クール・ジャパン
遠藤将都　スウェーデン幼児教育制度の日本との比較—Lpfo98、幼稚園教育要領、保育所保育指針から—

分田順子ゼミ

屋嘉千春　「医者半分・ユタ半分」　—ユタから見た沖縄の民族宗教—
石毛千草　盲ろう者の社会参加の現状と課題—コミュニケーションをキーワードとして—
小川真理絵　腐女子とは誰なのか　—ＢＬ・やおいに魅かれる心理—
小野寺雄哉　生活保護における自立支援の在り方—医療扶助／介護扶助受給者の場合—
小林亜未　「創造都市」によるホームレスの社会的包摂　—「つながり」の回復を焦点として—
佐藤央騎　ギャングスタ・ラップは白人のライフスタイルをどう変えたか　—５０ＣＥＮＴの影響を中心に—
東梅寿志　アメリカにおける創造論教育を巡る論争—２０００年代の事例から—
山蔭　葵　食文化の更新をめぐる一考察　—北米における醤油の受容を事例として—
高橋亜弥　原子力発電所建設と住民意思　—青森県六ヶ所村と新潟県巻町の事例を中心に—

山本芳美　（田口）ゼミ

池田友美　ロングステイから考える「観光」の意味—日本人定年退職者の長期滞在型余暇の事例から—
上杉菜月　化粧の力とその魅力　—自己肯定の化粧へ向けて—
大塚美穂　「コスプレ」にみる模倣と快楽　—ジェンダー・アイデンティティの視点から—
小野寺梢恵　「民話」の里遠野　—「遠野物語」がもたらしたもの
川田純香　ヒーチを通して視る遷り往く民俗行事の形態
皇甫　仙　日本の非信者のキリスト教結婚式について
小佐川郁美　サブカルチャーとカルチャーのあいだ—アニメミュージカルにおけるファン行動を事例に—
齊藤春奈　現代の葬送儀礼における自然葬・樹木葬—その発展の可能性—
武下宗子　沖縄の伝統芸能エイサーにみる「伝統」と「創作」　—エイサー団真南風と石垣島明石エイサーを事例として—
多代田　結　「半仮想社会」におけるネットコミュニケーションの形　—お絵かき掲示板をモデルとした考察から—
播本　望　ファストファッションの裏側　—いかに生まれ、いかに作られ、いかに捨てられるのか—

邊　英浩ゼミ

飯山はる菜　映画の比較文化
大沼伸太郎　海外へ向かう韓国移民
加藤　萌　美に関する日韓比較研究
高橋千代　貧困からの脱却
濱田　祥　韓国メディアの歴史
林　友里恵　嗜好品の広まりと健康への影響
原口梨紗　アダルトチルドレン
廣橋里香　北朝鮮体制の成立と今後について
文　香丹　変貌する儒教的なるもの
馬　楠　中国の少数民族　—回族—

研究論文・修士論文 — 文学専攻科・大学院文学研究科

文学専攻科

佐藤　隆先生

伊東一磨　新規採用教員をとりまく環境とその実態—若手教員への聞きとりから見えてくるもの—
君島由美江　子どもの成長を願う教師の姿を考える—つながりあう学級をとおして—

田所恭介先生

滝口司人　学び合う社会科の授業づくり　—小学校６年生歴史の授業から学ぶ—

田中昌弥先生

伊藤千穂　子どもの「何で？」を「わかった！」へ—渡辺恵津子さんの実践検討—

鶴田清司先生

松原圭史　暗記と活用
依田后可　『一読総合法をどう活かすか』　—読みを深めるための伝え合い、学び合い—

鶴田清司先生／藤本恵先生

松井美樹　『聴く力』を育てる教育

研究論文・修士論文 ― 文学専攻科・大学院文学研究科

森博　俊先生

横森　隆　困難を抱えた子どもたちに自然体験活動が与える影響　―発達障害をもつ子どもの事例に即して―

渡辺大輔先生

飯石加奈子　「マジョリティ／マイノリティ」を問い直す

大学院文学研究科

国文学専攻

阿毛久芳先生

小杉一徳　『一握の砂』論　―「明日」への自己批評性と「今日」という課題―

加藤静子先生

小野亜希子　『狭衣物語』小考

田中　実先生

岡田祐輔　『寒山拾得』論

英語英米文学専攻

今井　隆先生

堀江健太郎　Reconsidering the Importance of Pronunciation Instruction at the Very Beginning of L2 Learning

窪田憲子先生

戸倉健太郎　A Study on Mary Shelley's *Frankenstein* and Its Adaptations（メアリー・シェリーのフランケンシュタインとその翻案作品の研究）

竹島達也先生

久保田琴乃　A Consideration on American Families through Queer Plays（『クイア演劇における「家族」についての考察』）

社会学地域社会研究専攻

進藤　兵先生

山本慎一　「現代的」自治体公務労働論の構築に向けての一考察　―山梨県甲州市の公立保育所臨時保育士に関する実態調査を手がかりに―

横田　力先生

雨宮舞子　『教育の自由』再考　―子どもの人権を保障する学校教育をめざして―

斉藤拓実　現代日本社会における議会制民主主義の課題と公的討論の必要性　―Robert Post の憲法理論を手掛りに―

比較文化専攻

伊香俊哉先生

薛　玉珊　日中戦争と上海日本人小学校

大森一輝先生

東　恵美　プロ野球から見るアメリカ社会の問題点　―*Sports Illustrated* を通して考える―

稲葉　睦　太平洋の「核問題」観　―太平洋諸島フォーラムを中心に―

鳥居明雄先生

伊井　茜　日本現代写真論　―奈良原一高「人間の土地」にみる日本現代写真の発端

臨床教育実践学専攻

春日作太郎先生

森田成美　大学生の自主グループにおける体験過程の深まりに及ぼす対人的相互作用の効果について

佐藤　隆先生

陣野原真理　「山崎隆夫のライフヒストリーを通して子ども期を保障する少子像を探る」

田中昌弥先生

谷田川美帆　過去と未来をつなぐ「地域に根ざす教育実践」の今日的意味　～北海道檜山群上野ノ国町の「ふるさと学習」切り口として～

筒井潤子先生

長澤宏治　教育・福祉の狭間からみえるもの　～SSW 実践を通して～

森　博俊先生

笠井正宏　教師の「子ども理解」とその基盤　―地域に生きる小学校教師の聞き取りを通して―

講演会だより　初等教育学科主催　講演会

2011年度初等教育学科主催講演会

岡野薫子先生

「子ども時代は今につづいて」

2012年1月18日（水）、1号館303教室において初等教育学科講演会が開催され、作家の岡野薫子先生に「子ども時代は今につづいて」という題名で講演をしていただきました。

岡野先生は子どものころから多くのことに興味がありました。特に昆虫や文学などが好きで、ファーブルやシートンのようになりたいと思っていました。そのため、科学映画の道に進み、脚本を手がけることもできたのでしょう。

岡野先生は、本格的に文学の道に進んだ理由として、科学映画の脚本ではできなかった、自分の思い通りの表現をしたいと考えたことをあげられました。その中で先生は、当時あまり世間に知られていなかったラッコと言う存在に出会いました。そのラッコを調べる面白さから「銀色ラッコのなみだ」が生まれました。その後も多くの作品を手がけましたが、周囲の人々から「動物作家」と呼ばれ、ファンタジーは書けないと評価されたことに不満を持ち、幼年文学も手がけるようになりました。

岡野先生は読者の視点や解釈を重視しています。同じ作品でも大人と子どもでは解釈が異なります。童話でも、子どもだけのものではないと考えています。人によって捉え方が違うことを、解釈の怖さというものだともおっしゃっていました。また、岡野先生は挿絵も手がけています（その挿絵等、貴重な資料の展示が12月12日から1月29日まで付属図書館で行われていました）。その絵もいつも同じ手法で描いているということはなく、多くの手法に挑戦しています。「銀色ラッコのなみだ」の挿絵では、スクラッチという手法を採用しました。これは、失敗が許されない、面白いなどの理由からだということです。現在でも岡野先生は様々な手法を試みています。

今回の講演から、多くのことに挑戦する面白さや、人々のそれぞれ異なる解釈の大切さなどを知ることができました。

貴重なお話をしていただき、ありがとうございました。

（初等教育学科３年　山本英明）

講演会の様子

講師紹介

岡野薫子（おかの　かおるこ）

1929年東京生まれ。東京農業教育専門学校（現：筑波大学）附設女子農業教員養成所卒業後、中学校教員（生物）、科学雑誌の編集等を経て、科学映画の企画・脚本を手がける。その後、文学の創作を始め、1964年初めての長編「銀色ラッコのなみだ」でサンケイ児童出版文化賞ほか多数受賞。児童文学作家としての地位を確立した。現在も創作を続けるほか、後進の指導にあたっている。

講演会だより

国文学科主催　秋季講演会

2011年度国文学科秋季講演会

山崎一穎先生

「今、文学に求めること＝その有効性をめぐって ―歴史小説を手がかりとして―」

2011年度、国文学科秋季講演会は跡見学園大学の山崎一穎先生をお迎えし、表題のようなタイトルで10月26日、御講演をお願いしました。山崎先生のご経歴は実に多彩、定時制の高校の教諭から大学の跡見学園の学長のほか、中学・高校の校長、森鷗外記念会会長・津和野森鷗外記念会会長のほかいくつもの役職を兼務されています。こ

当日の講演会の様子

のことは先生の近代文学研究を推進させて行くことと無縁ではありません。多元的に世界を捉えさせる可能性に富んでいるからです。お話も文学の有効性を問うという根本的なところからお始めになり、「人間の心の闇」を解剖し、「歴史の闇の発掘」を歴史家ではなく、小説家たちが果たして来た、そこに文学の担う役割があることを具体的に微に入り、細に入って、お話になり、国文学科の学生諸君も魅了されただけでなく、人生観そのものが動かされたのではないかと思われました。

先生は〈「歴史とは物語である」ことを認めた上で、事実に近づける〉というお立場です。具体的には近代史を薩摩や長州に敗北し、賊軍にさせられた敗者の側から捉える、まず北海道の刑務所には政治犯が収監され、道路は囚人たちが作ったこと、しかも、郷土史ではそれらが明らかでも地元の名誉にならないために埋もれていること、アイヌ民族のこと、相楽総三の〈偽官軍事件〉も藤村の『夜明け前』や長谷川伸の『相楽総三とその同志』などで浮上してきたこと、今も県庁所在地が会津若松ではなく、福島にあること、山崎先生のお話は臨場感に満ち満ちています。そして、最後に、明治維新についてお話になりました。

慶応3年11月9日の王政復古令は「百事御一新」、遊女の解放も全て謳っていた、つまり、全ての分野で御一新だったのですが、翌年2月の「御沙汰書」には「王政御一新」、「皇帝御一新」、4月の『政体書』では「王政維新」となって、「御一新」も消えている、「維れ新たなり」では「わけはのわからないこと」、「日本の国はスタートから間違っていた」と語られ、聴衆の我々を呑みこみます。

山崎先生、私の都留最期の年度、よくお出で下さいました。心からお礼申し上げます。

（国文学科教授　田中　実）

講師紹介

山崎一穎（やまざき　かずひで）

1958年　長野県生まれ。早稲田大学、同大学大学院卒業後、千葉県船橋高等学校定時制の専任教員として勤め、1970年から跡見学園女子大学国文学科の専任教師となる。
2008年まで跡見女子大学で教授、学長などを務めた。専門は森鴎外で、2001年「森鴎外・歴史文学研究（欧風社）」でやまなし文学賞を受賞。

講演会だより　英文学科・英文学会共催講演会

英文学科・英文学会共催後期講演会

Nicola Galloway 先生

「Attitudes towards English in relation to English as a Lingua Franca」

去る１月17日、本学２号館において、英文学科・英文学会共催後期後援会が開催されました。講師として、立教大学経営学部国際経営学科助教の Nicola Galloway 先生をお迎えし、“Attitudes towards English in relation to English as a Lingua Franca”という演題で講演していただきました。“Lingua Franca”とは、「異なる言語を使う人たちの中で、意志疎通手段として使われる言語」を指します。今回の講演は、こ

の“Lingua Franca”としての英語をテーマに進行されました。

スコットランド出身の Galloway 先生は、来日された頃より、日本人の用いる英語も含めて世界中で話されている英語についての研究をされてきました。現在、英語は10数億人の人々に話されています。20世紀に入り、アメリカの存在が世界で重要になってきたことで、英語は諸外国で学ばれるようになりました。しかし英語が世界中に広まるにつれて、イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドなどに存在するネイティブスピーカーとしての英語話者は次第に minority ＝少数派になってきたのです。もはやインド、パキスタン、フィリピン、シンガポール、アフリカ諸国などで第２公用語として用いられる英語話者の方が、majority ＝多数派になっています。「言語としての英語と、それを母語とする国々だけを純粋に結びつけて考えることは有効ではない。むしろ世界中で英語を用いる国々と結び付けて考えることが、これから重要になってくる。」と、Galloway 先生は結論づけられました。このような世界英語の歴史だけではなく、日本人がよく使う間違った英語や、日本人が作りだした Japanese English についても先生は言及され、聴講者は非常に関心を示していました。

講演は、Galloway 先生のユーモアあふれる語り口によってたいへん和やかな雰囲気で行われ、また聴講者参加型のワークショップ的なものもあったので、終始会場は盛り上がりを見せました。質疑応答では、留学生も含めてさまざまなバックグラウンドを持つ学生から世界言語に関する質問が飛び交いました。どの質問にも感心され、その一つ一つに、知識に裏付けされた詳細情報を交えて回答されていた先生の姿も印象的でした。

今回の講演を通して、新たな見地から英語を見つめなおすことができたといえます。これから英語をより深く学んでゆく学生にとって、非常に有意義な講演でした。貴重な研究成果を本学で講演していただいた Nicola Galloway 先生には、たいへん感謝しております。ありがとうございました。

（英文学科２年　吉田俊介）

講師紹介

ニコラ・アン・ガロウェイ
（Nicola Galloway）

スコットランド出身。2001年　グラスゴー大学　行政社会学部　地理・政治学科卒業。2004年　スターリング大学大学院　教育研究科 応用言語学専攻より修士号を取得。2011年サザンプトン大学大学院　博士課程後期　現代語専攻　満期退学。専門は英語教育学。神田外語大学専任講師を経て、2010年より、立教大学経営学部国際経営学科助教。

講演会だより　文学研究科英語英米文学専攻主催　講演会

文学研究科　英語英米文学専攻主催講演会

ダーニエル・カーダール先生

「Politeness and Rituality」

2011年12月7日（水）、平成23年度都留文科大学院文学研究科英語英米文学専攻主催の講演会が行われました。講演は、Politeness and Ritualityという題目の下、ハンガリー国立社会科研究所研究員で、台湾アジア大学准教授であるダーニエル・カーダール博士により英語で行われました。カーダール博士は、ハンガリーという国籍を持ちながら、英語圏をはじめ中国、台湾、日本文化にも精通しておられ、そのような側面から言語文化、言語ポライトネス、社会語用論、異文化間コミュニケーションを深く分析し、Politeness in East Asia（ケンブリッジ大学出版）や、Politeness in Historical and Contemporary Chinese（Continuum社出版）など多数の著作、論文を発表されています。

今回の講演会において、カーダール博士はその幅広い見識のもと、私たちの言語使用におけるその意図や意味を、社会的儀式(social ritual)という形式的な側面からだけでなく、身近にある日常的な社会的人間関係の中で見られる儀式的やりとり(group ritual)という切り口から分析し、わかりやすく講演して下さいました。講演の中で、私たちが日常行う仲間同士の電子メールのやりとりや父娘のやりとりなどの例を取り上げ、人は無意識的に、その中でのみ通じる言語的コミュニケーションを成立させており、このようなことの中に含まれる「語用論的意味」や「背景知識」を知ることで、人間関係を円滑に構築できると教示して下さいました。さらに西洋的見地からは見過ごされがちな視点である社会的儀式(social ritual)を再考察し、今日まだ様々なアジア圏の国々の文化の中に根強く残るこのような形式的・伝統的な社会儀式的側面の中にこそ、今日の言語コミュニケーションにおける相互交渉への多くの示唆が得られるのだということを強調されました。

アジア文化、特に中国や日本における文化的側面を熟知しておられるカーダール博士による言語ポライトネスについての講演は、私たち日本人が当たり前として捉え、意識することのなかった言語使用の社会的儀式側面と日常的儀式の側面をあらためて浮き彫りにし、その機能の有効性を示して下さり、言語学を学ぶ者やコミュニケーションに興味を持つ者にとって、大変貴重な機会となりました。特に、今回の講演は英語で行われたので、今後の学びにつなげようと熱心に耳を傾ける大勢の学生にとって、有意義なものになったと確信しています。講演後、カーダール博士からも都留文科大学の学生の聴講態度について、とても熱心で感心したと御誉めの言葉をいただくことができました。最後に、カーダール博士、講演会運営にあたりご尽力下さった福島先生、そして講演会に参加して下さった学生の皆様に感謝を申し上げ、結びとさせていただきます。

講演会の様子

（大学院英語英米文学専攻1年
小高聖恵）

講師紹介

ダーニエル・カーダール(Daniel Z. Kádár)

ハンガリー出身
現在ハンガリー国立社会科学研究所(Research Institute for Linguistics Hungarian Academy of Science)研究員、台湾アジア大学准教授。
専門は言語ポライトネス、言語礼儀、社会語用論、異文化コミュニケーション、談話分析、歴史語用論。

講演会だより　社会学科・地域社会学会共催　講演会

2011年度後期社会学科・地域社会学会共催講演会

津田大介先生

「ネットメディアの未来」

2011年度後期・社会学科／地域社会学会共催の講演会は、津田大介さんを講師に迎えて2011年12月21日に開催された。150人以上の学生・教員が集まり、熱心に講演に聞き入り、参加した。

「ネットメディアの未来」と題した講演で津田さんは、ツイッターやフェイスブック等のソーシャル・メディアについて、「共感」・「リアルタイム」・「新しさ」の３つを特徴とするメディアであると説明。とくに震災後に、被災者を含めた各地の人々が自ら情報発信する道具として重要な役割を果たしたことを紹介した。さらに、ソーシャルメディアの普及によって以前では考えられなかった人と人とのつながりが可能となったいま、「情報発信しないところには何もリターンがない」のだから、積極的に情報発信していこうと呼びかけた。また、会場からの質問に答えて、ツイートの仕方やフォロワーの増やし方、実名とハンドルネームの使い分けなどについての実践的アドバイスも提供した。

今回は、日本でツイッターを広めた人として知られる津田さんが講師とあって、メイン・スクリーンの横にもう一つ別のスクリーンを設置し、ツイッターの画面（今回の講演会に関係するツイートのみを表示する画面）を映し出して、津田さんの話に対する感想を、話と同時進行でリアルタイムに写し出す（刻々と更新していく）という試みをした。また、ツイッターでの書き込みに使うために、図書館の日向先生のご協力により、大学のiPad20台を貸し出した。講演会終了後のアンケートに答えた81人のうち33人が講演を聞きながらツイートした（ツダった）と答え、「現代感があった」「より参加している感じがした」等の好意的な評価が寄せられた。

ツイッターを映し出す
第２スクリーンも設置した会場の様子

講演会もこれからは「双方向」であることが重要だろう。質疑応答セッションでみんなの前で手を挙げるのはハードルが高いが、感想をつぶやいたり、それに共感を示したりすることは気軽にできるし、より多くの人の教えが共有できる。今回の「ツイッター連動企画」は初めての試みで、色々改善すべき点もあったが、「講演」という古くからある情報共有の機会を、新しいメディアによって再生していく試みとして意義があったのではないかと思う。

（地域社会学会事務局長／
社会学科准教授　平林祐子）

講師紹介

津田大介（つだ　だいすけ）

1973年東京都生まれ。ジャーナリストもしくはメディア・アクティビスト／早稲田大学大学院政治学研究科非常勤講師／J-WAVE「JAM THE WORLD」火曜ナビゲーター。Google, Twitter等をいち早く取り上げて広めた人。「ツダる」の語源になった人。@tsudaのフォロワー数196, 757人、ツイート数41,029（2011年12月8日現在）。

講演会だより　比較文化学科主催　講演会

2011 年度比較文化学科主催講演会

ウワディスワフ・W・A・スピルマン先生

『父、「戦場のピアニスト」ウワディスワフ・シュピルマンの戦争体験と私』

平成 24 年 1 月 20 日、九州産業大学の教授ウワディスワフ・W・A・スピルマン先生をお招きして、講演会を行ないました。2 号館 101 教室が会場でしたが、学生や市民の方およそ 100 人以上が参加され、先生のお話を伺っていました。

スピルマン先生の父親であるウワディスワフ・シュピルマンさんは、映画『戦場のピアニスト』の主人公のモデルとなった、ポーランドで有名な音楽家です。今回の講演会では、スピルマン先生から見た父親の人物像を中心に話が進んでいきました。

『戦場のピアニスト』は、第二次世界大戦中のポーランド・ワルシャワを舞台とした映画です。主人公のシュピルマンは、戦争で家族を失い、また壊滅状態となったワルシャワで、多くの人の手を借りながら戦後まで生き延びます。講演の中で、スピルマン先生は、「父を救ったポーランド人全てが英雄なのです」と語られました。第二次世界大戦下で、ユダヤ人を匿うことは死を意味しました。しかし、死を恐れずシュピルマンさんを助けたポーランド人は、たくさんいたのです。そのような人たちの勇気と覚悟で、シュピルマンさんは最後まで生き残ることができたのです。

そして、凄惨な戦争から生き残ったシュピルマンさんも、スピルマン先生にとっては一人の父親でした。スピルマン先生は、小さな頃は父親とはあまり遊ばなかったと語られました。常に仕事をし、寡黙であった父親に、幼いころのスピルマン先生は物足りなさを感じていたようです。しかし、先生は、「今になって考えると、父は、仕事をすることで、戦争の体験を忘れようとしていたように見えた」とも語られました。悲惨な体験で、家族も友人も住む家もなくしたシュピルマンさんは、自分が運よく生き残ってしまったことに対して罪悪感を覚えていたといいます。そのような父親の姿を見て、スピルマン先生は、「戦争の傷は一生消えない」と語られました。

スピルマン先生の話を真剣に聞く学生たち

映画では知りえなかった「戦場のピアニスト」のその後のお話しはとても興味深く、参加者は大きく頷きながら耳を傾けていました。また、先生のユーモアを交えたご説明に、時折笑い声ももれていました。講演会日程は無事終了いたしましたが、遠い九州から足を運んでくださったスピルマン先生と奥様に改めてお礼申し上げます。

（比較文化学科　篠原双葉）

講師紹介

クリストファー・W・A スピルマン

1951 年ポーランド・ワルシャワ生まれ。福岡在住。

1973 年英国リーズ大学ロシア語学部を卒業し、1993 年に米国エール大学大学院にて歴史学博士号を取得。現在は、九州産業大学国際文化学部日本文化学科の教授。専門は、日本近代史、特に戦間期のアジア主義、革新思想、保守思想を研究。

講演会だより　ジェンダー研究プログラム７周年記念講演会

ジェンダー研究プログラム７周年記念講演会

「ジェンダーの矢を放て —デンマークとアメリカから」

質問に応える講師

2011年12月10日に、ジェンダー研究プログラムの創設７周年を記念する講演会が行われた。「ジェンダーの矢を放て——デンマークとアメリカから」と題された今回の講演会は、2010年度からの３カ年にかけて重点領域として大学から補助金を受けたジェンダー研究プログラムのさらなる推進のための事業の一環でもある。学内ではジェンダー研究記念事業実行メンバーが、ジェンダー研究プログラム委員会を補助する形で準備にあたった。

都留文科大学ではこれまでも海外からの講演者を招いての講演は多くあったが、今回のものは、これまでにない大きく国際的な講演会となったといえる。講演者はデンマークのコペンハーゲン大学教授のバージット・ポッシング氏とアメリカのオハイオ州でレズビアン活動家として女性や同性愛者の人権問題に取り組むジャン・グリージンガー氏のお二人で、講演会には100名以上の聴講者が会場を訪れた。学生は初教、国文、英文、社会、比文の学生たちのほかにも、大学院生や留学生が大勢参加した。教員は、加藤祐三学長、福田誠治副学長などが出席されたほか、非常勤の三橋順子氏や各学科のジェンダー研究プログラムにたずさわる教員がほぼ総出の盛大な会となった。

会は本学英文学科の窪田憲子教授の司会のもと進行した。まずは、ジェンダー研究プログラム副委員長である比較文化学科の分田順子教授から開会の辞が英語と日本語の両方で述べられた。その後、比較文化学科の大辻千恵子教授によりコペンハーゲン大学教授であるポッシング氏のご紹介があり、引き続き、ポッシング氏による講演「教育のパイオニア、ナタリー・ザール——ジェンダー・教育・権力」が英語で行われた。

日本ではまだほとんど知られていないデンマークの女子教育のパイオニアであるナタリー・ザールについての知識を得ることは聴講者にとって非常に貴重な経験であったといえる。英語講演は、国際交流室の滝口峰子専門員により通訳され、日英の両言語で滞りなく進んだ。

次に英文学科の中地幸がアメリカでレズビアン活動家として積極的に社会問題に取り組み続けるグリージンガー氏を紹介し、グリージンガー氏は「アメリカのウーマンリブ運動——過去・現在・未来」という題目で講演された。「オールド・レズビアン」としてのアイデンティティを主張することでアメリカの根強い女性差別・同性愛嫌悪・年齢差別に挑むグリージンガー氏の話は、アメリカ社会の現実を学生たちにより近く感じさせるものとなったといえる。この講演は、外国語教育センターの和田望非常勤講師が日本語へと通訳をされた。二人の講演終了後は、司会者と講演者と通訳が壇上に上がり、会場からの質問を受けた。会の後は茶話会と懇親会が和やかに行われた。

（英文学科教授　中地　幸）

講師紹介

バージット・ポッシング

現在、コペンハーゲン大学教授およびデンマーク国立古文書館上級研究員。19世紀～20世紀のスカンディナヴィアの教育史、女性史とジェンダー研究の方法論、歴史的な伝記研究の方法論について主に研究されている。

ジャン・グリージンガー

アメリカのレズビアン活動家。1970年代より同性愛者の権利獲得や女性の人権問題に取り組む。

現在、変革を求めるオールドレズビアン団体（Old Lesbians Organizations for Change)副会長。

文大だより

第8回地域交流研究フォーラムの開催

『大田堯先生とともに考える“生きる”こと、“学ぶ”こと、そして未来へ…』

地域交流研究センターにおける活動の三つの柱、「フィールド・ミュージアム」、「発達援助」、「暮らしと仕事」の各部門の内、「フィールド・ミュージアム」は、その源を、1977年から1983年まで、本学学長として大いにご活躍され、その中で、本学を地域と自然に根ざす大学として、「都留自然博物館」構想を提唱した、大田堯先生に遡ることが出来ます。2011年7月には、大田堯先生のドキュメンタリー映画『かすかな光へ』が完成、同時に東京での上映を皮切りに、全国へと広がり、本学でも、2011年11月23日に「文大名画座」で上映会を開き、多く方たちに感動を与えてくれました。2012年1月16日には、伝統ある映画雑誌「キネマ旬報」文化映画部門において第8位に選定されました。この映画における都留文科大学やフィールド・ミュージアムとの関わりの深さを基に、また、寄せられた多くの感動を基に、この映画を中心としたフォーラムの開催を企画し、地域交流研究センターにおける年間最大行事であります、第8回地域交流研究フォーラムを2012年1月28日（土）に開催いたしました。テーマは、『大田堯先生とともに考える“生きる”こと、“学ぶ”こと、そして未来へ…』と題し、『かすかな光へ』の上映を基調講演としてとらえ、その後は、大田先生をお迎えしての懇話会を企画しました。しかし、大田先生の怪我というアクシデントのため、都留までの移動が難しいとのこととなり、急遽、大田先生の自宅と大学を結んだネット中継ということで、大田先生にはスクリーンを通しての参加ということで開催いたしました。

スクリーンを通して大田先生登場

会場の様子

会場には都留市内を中心に110名の方々が集まり、映画『かすかな光へ』では、大いに感動し、続く、懇話会においては、さいたま市に住む大田先生への質問や感想に対して、敏速かつ的確な言葉で次から次へと展開される対応は、93歳という年齢は全く感じさせず、そこに発せられることばの一つ一つにさえ、また新たな感銘を受けました。

参加した方々からは、大田先生が来られなかったことが残念だったこと、映画の中で断片的に流れていたお話を全て聞きたいという声、生きる力を頂いた、そして夢を持つことの大切さを感じたということばが多く寄せられました。

（地域交流研究センター長　杉本光司）

文大だより

文大合唱団の活動について

優しさを育み続ける都留

合唱団顧問・指揮者　教授　清水雅彦

２月７日（火）の読売新聞宮城県版「よみうり文芸」に『合唱団師走の街に唄いしは瓦礫と化した「ふるさと」の歌』と、山元町の男性の方の投稿が掲載されたとのこと。それをお知らせくださったのは、ご自分たちも被災され、今あらゆることで復興のために動かれている同窓会宮城県支部の方でした。溢れる思いを現実の形にすることが叶わなかった私たちを、被災地にお招きくださった同窓会の皆様のあつい思い、見事な行動力に敬意と感謝を捧げたく思います。また自主運営が大切である大学のサークル活動を日々真摯に執り行い、高く篤い芸術を共に創り上げてくれる学生たちを誇りに思っています。

３年連続金賞受賞を果たした全国大会のステージも、被災地でのコンサートでも、共通しているのは“優しさ”であり、それは都留という街が、大学が、ずっと育み続けているもの……。これからも合唱団とともに、真摯な活動をしていきたい、そう強く思っています。

合唱コンクール

１年を振り返って

合唱団団長　初等教育学科３年　村松杏理

この１年間を振り返ると、平成23年３月11日に発生した東日本大震災により、私たち合唱団も「震災」と切り離せない活動をしてきました。地震直後の混乱の中で、「私たちに何かできることはないだろうか？」と考え、都留市内で「復興応援コンサート」を開催しました。また、同年９月に行われた「学生たちの新たなスタートはこね音楽祭2011」や「中学校訪問」では、カワイ出版の「歌おう日本プロジェクト」に寄せられた曲を演奏しました。更に、合唱団の集大成でもある定期演奏会では、一部を「被災地応援ステージ」とし、祈りを捧げると共に、12月中旬には被災地を訪問し、クリスマスコンサートを開催しました。

今年１年は、震災の影響から、練習の場所や時間の制限、計画停電による大会ス

サマーコンサートにて

文大だより

ケジュールの変更など、例年のようにはいかないことが多くありました。しかし、厳しい条件の活動の中で、団員同士が指摘しあい、分かり合うことが自然とできるようになっていたのではないかと考えています。また、今年度の活動を通して団員一人ひとりが大事な存在であること、みんなで合唱できることの喜びを再確認したのではないかと思います。

石巻市東浜小学校にて
（被災地支援コンサート１日目）

被災地支援都留文科大学合唱団 クリスマスコンサートに同行して

総務課長補佐　藤本信夫

12月17日、18日の２日間、宮城県山元町山下中学校、石巻市東浜小学校において開催された合唱団によるクリスマスコンサートは、被災地の同窓会宮城県支部から“被災者の心のケアのため都留文科大学合唱団のコンサートを行ってほしい”“3年連続全国大会金賞を受賞した歌声を被災者に届けてほしい”との依頼を受けたもので、同窓会の役員会、理事会、総会での支援決議を受け、また合唱団顧問・指揮者の清水先生から「ぜひ行わせていただきたい」という即答もいただき、実施に向け打合せを重ねていきました。

１日目宮城県山元町山下中学校の校歌からはじまったコンサートは、「コンクール金賞受賞曲、上を向いて歩こう、聖しこの夜、赤とんぼ、ふるさと」などが披露され、被災者からの“ふるさとは震災後歌えなかった、今日ようやく歌うことができた”という話に皆涙を抑えることができなく、歌う力の素晴らしさ、被災者を元気にしたいという気持ちが伝わったことにこころ打たれました。

２日目石巻市東浜小学校は８月まで避難所にもなっていた場所でもあり、家の基礎もないなど震災の爪あとが多く残っている中250人を超す方に集まっていただきコンサートが実施されました。クリスマス大抽選会、綱引きやダンスなどの交流も行われ、山元町・石巻市での２日間にわたるコンサートは目的を果たし無事終了することができました。

この支援につきまして、準備･実施計画、コンサート進行にあたった同窓会宮城県支部の皆さま、素晴らしい歌声を届けてくださった合唱団の皆さま、清水先生、同窓会役員の皆さま、多くのボランティアの皆さまに心よりお礼申し上げるとともに、コーディネートした身として同行もさせていただき、多くの感動と出会えたことに感謝しています。

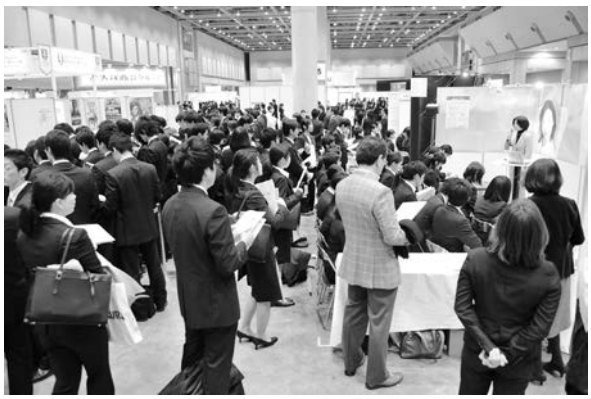
宮城県山元町山下中学校にて
（被災地支援コンサート２日目）

文大だより

キャリアサポート説明会

就職の厳しさが報じられる状況下、キャリアサポート室では学生の意向や将来の生活設計を最優先に考え、学生の役に立ち信頼される運営をモットーにしている。本学では、企業・教員・公務員志望の各領域に大きく分けて様々な講座、セミナー、説明会等を開催している。

今回は、新たに実施した事業に触れてみる。本学でも企業の志望が増える中、今年度初めての試みとして東京ビッグサイトで開催された合同企業説明会に約80人の学生をバス２台で引率した。夕方の６時までの終日で平均６～７社のブースを訪れていた。文系百社に及ぶ企業の中で、大きな刺激を受け、充実した時間を過ごすことができ満足した表情で帰路につけたようである。バスの中の学生の声に耳を傾けてみると、地方にある大学がこうした企画に積極的に参加をしていくことは意義あることだという発言があった。



合同企業説明会の様子

文大名画座　～名画の上映とトーク第９弾～

本学教員を広く市民の皆様に紹介するとともに、教員自身がお勧めの映画を上映し、その「想い・エピソード」を語る文大名画座を、平成18年度より地域貢献活動の一環として開始しております。今年度は第１弾として11月に「かすかな光へ」を、第２弾として２月に「ヒマラヤ杉に降る雪」を上映いたしました。

第１弾“かすかな光へ”

第１弾の「かすかな光へ」は、11月23日に２号館101教室において上映しましたが、本学の元学長で教育研究者の大田堯先生の挑戦を描いた“ドキュメンタリー作品”であり、社会学科の畑 潤教授に解説していただきました。教育関係者や多くの市民の方など約100名が鑑賞され、「教育という意味を考え直す良い機会となった」などの感想が寄せられました。なお、この作品は、キネマ旬報の2011年文化映画ベスト・テンで８位に選出されました。

第２弾として２月15日に、英文学科の松土 清特任教授による解説で「ヒマラヤ杉に降る雪」を自然科学棟Ｓ１教室にて上映しました。この作品は原作がアメリカでベストセラーとなり、戦争により翻弄される恋と人種間に横たわる偏見に焦点を当てた“ヒューマンドラマ”です。内容もさることながら、美しい映像や音響リズム、小道具の醸し出す象徴的効果など、いつまでも心に残る演出も見事でした。当日は寒い日であったにもかかわらず、学生さんからご年配の方まで、また、市外からも多くの方が参加されました。会場もほぼ満員状態で、約100名の方がこの作品を鑑賞されました。観賞後には、「“真実を貫いて生きる”ということの大切さを教えてくれる良い作品だった」、「大きなスクリーンで大変見やすく、映像や音響効果、内容もすばらしかった」などの感想をいただきました。

第２弾“ヒマラヤ杉に降る雪”

文大だより

平成 23 年度　県民コミュニティカレッジ講座の実施

平成 19 年度より山梨県内の大学・短期大学とＮＰＯ法人「大学コンソーシアムやまなし」の共催事業として、広く市民の方々に学習機会を提供することを目的として、「県民コミュニティカレッジ講座」を開催しています。今年度は 11 月と 12 月に４回にわたり、附属図書館４階学習室を会場として実施いたしました（第４回目のみ 1105 教室）。今回は全体のテーマを「都留の自然と暮らし～自然と共生したまちづくりのために～」とし、市内に生息する動植物などの生態や、地震と火山の関係について学ぶことで都留市をより深く理解するとともに、地産地消の観点から、本学で開発した「豆腐キット」（あおはた大豆原料）による豆腐の試作を通して、豊かな恵みの恩恵も確認しました。また、従来は平日の夕方に実施していましたが、参加しやすいように土曜日の午前 10 時から開催したところ、昨年を大幅に上回る方に参加いただけました。全４回の講座は次の通りです。

第１回目　坂田教授の講座

第２回目　中井教授の講座

第３回目　北垣特任准教授の講座

第1回　11 月 12 日（土）　講師：初等教育学科　坂田有紀子教授
カワラナデシコの咲くまちへ　～都留市におけるカワラナデシコの分布と現状～

第2回　11 月１９日(土)　講師：初等教育学科　中井　均教授
自然災害から身を守るために　～都留の自然災害危険度～

第3回　12 月３日（土）　講師：地域交流研究センター　北垣憲仁特任准教授
地域は本物と出会える生きた博物館　～都留の自然と人々の暮らしの知恵に学ぶ～

第4回　12 月 10 日（土）　講師：初等教育学科　吉住典子名誉教授
地産地消の観点から作成した豆腐キットの実際

各講座の参加者からは、「カワラナデシコが咲いてくれるよう育てます」（第１回目）、「都留市で起こりうる自然災害の危険性を学ぶとともに、考えさせられた」（第２回目）、「フィールドミュージアム・大学・都留市と自然のつながりを楽しく学べた」（第３回目）、「はじめて手作り豆腐に挑戦したが、とても美味しくできてよかった。学生さんとも交流できて楽しかった」（第４回目）などのご意見が寄せられ、いずれの講座も盛況でした。

第４回目　吉住名誉教授の講座

文大だより

展示会「素堂と句合」のこと

国文学科教授　楠元六男

昨年12月17日から本年２月12日にかけて、ミュージアム都留において「素堂と句合」というタイトルで展示会を開催した。

まずは本企画にいたるまでの経緯から説明することとしたい。国文学科の近世ゼミ生を中心として、毎週火曜日の六限目に研究会を開催しており、その研究会でとりあつかった内容を、ミュージアム都留で展示することになっている。

昨年度は、山口黒露に関する展示を挙行したが、今年度は山口素堂をとりあつかった。両者は義理の親子関係にある。素堂が父で黒露が息子、という関係である。

山口素堂は、かの松尾芭蕉と同時代に活躍した人で、芭蕉の文学活動を支える重要な人物であった。しかも甲斐出身の人で、我々がとりくむにふさわしい人物と判断したのである。今回は、素堂の編集した『とくとくの句合』に照準を定めてある。素堂は必ずしもプロの俳人ではなく、芭蕉周辺にいた俳諧好きの隠者にすぎない。よって通常の俳人のごとく、多くの編著があるわけではなく、唯一まとまった本として『とくとくの句合』が知られるにすぎない。他にお茶関係の本が確認される程度であろう。

ギャラリートーク

しかし、その存在意義ははてしなく大きい。なぜならば、松尾芭蕉の俳諧に深く与っているからである。ただし、決して芭蕉の弟子ではなく、あくまでも友人として、足跡をともにした点において文学史的意義は大きい。

さて、研究会においては、まず『とくとくの句合』の諸本関係を確認する作業から出発した。天理大学綿屋文庫蔵の自筆稿本をとりよせ、さらに版本の杉浦版・東門子版の検討に入った。付言しておくと、この三種の写本・版本はすべてその内容を異にする。ことに写本と版本とでは、まったく別物といった趣きすらある。そうした結果を視野に入れながら、作品注釈に入り、あわせて展示会の準備に取り掛かった。

「素堂と句合」図録より

事業の概要を列記しておくと、次のようになる。翻刻の完成。注釈作業の推進。チラシおよびポスターのデザイン作成。図録の構成検討。図録用原稿の完成。展示会の構成検討。展示会の解説パネルの完成。思いつくままに、諸事業の内容を摘出してきたが、さらに毎日曜日には、市民の方々を対象としたギャラリー・トークまで挙行している。

これらの諸事業が、すべて学生によって推進されていることも留意すべきか。この事業を背後で支えてくださった大学当局・ミュージアム都留・後援してくださった諸機関の方々に衷心から謝意を表するものである。

文大だより

教養科目『地域交流研究Ⅲ』
－「やまなし観光カレッジ事業」との提携開始－

この科目は、山梨県観光部における新事業「やまなし観光カレッジ事業」との提携により、表に示すように、県内各分野の第一線で活躍している方を講師に招いての10回の講座、土曜日開催の２回のフィールド・ワーク、そして１回以上のイベント・ボランティア参加という３つの要素から構成されています。

日　程	テ　ー　マ	講　師	備　　考
10月13日	山梨県の概要	横小路　稔	山梨県観光部
10月20日	山梨の歴史	小畑　茂雄	山梨県立博物館
10月27日	観光と地域活性	佐藤　あづみ	(財)キープ協会企画部
11月10日	富士北麓の地域振興	小佐野　常夫	前河口湖町長
11月17日	山梨と富士山	横尾　幸江	ひめねずみ社
11月24日	山梨の果実	堀内　圓	甲斐いちのみや金桜園
12月1日	郡内織物の新しい挑戦	前田　市郎	甲斐絹座(前田源商店)
12月8日	都留の自然	西　教生	都留文科大学非常勤講師
12月15日	だっちもねえこんいっちょし	五緒川　津平太	作家(本名:大堀卓)
12月22日	甲州印傳	上原　勇七	(株)印傳屋上原
各自の日程	イベントボランティアへの参加		

日　程	方　面	視　察　先
11月12日(土)	郡内地域	山梨県環境科学研究所、山梨県立富士ビジターセンター、富士吉田歴史民俗博物館、都留市尾県郷土資料館
12月3日(土)	国中地域	かいてらす、山梨県立博物館、大日影トンネル、シャトー勝沼

山梨県知事発行の修了認定証を受け取るためには、①７割以上の講座出席、②１回以上のフィールド・ワーク参加、③１回以上のイベントボランティア参加、④山梨県観光行政に対する提案レポート提出、という４つの条件をクリアしなければなりません。特に、今回からは、地域で開催されるイベントへのボランティア参加という条件が加わったため、学生たちは工夫して県内各地で奉仕活動を行いました。受講者の感想は、山梨に関して知らなかった多くの魅力を楽しみながら発見でき、山梨がとても好きになったという言葉が多数寄せられました。

１月25日には、加藤学長、堀内山梨県観光部次長からのお祝いの言葉を頂き、第一期「やまなし観光カレッジ」修了認定者87名に対して、認定証授与式が開催されました。しかし、これで、めでたく「地域交流研究Ⅲ」も成績認定となるわけではなく、更に課題レポートの提出が義務付けられます。

（「地域交流研究Ⅲ」担当　杉本光司）

５割の学生が本学周辺にいた
―東日本大震災時の学生たちの行動アンケート結果―

昨年３月11日の東日本大震災時には、春休み中ながら５割の学生が大学周辺におり、そうした学生の８割が、当日の夜は友人と一緒に複数で過ごすなど、「普段と違う過ごし方」をしていたことがわかった。

これは昨年末に社会学科都市環境設計論ゼミの山岸良さん（４年生）が中心となり、在学中の２～４年生の全学生を対象に行った「東日本大震災時の学生たちの行動に関するアンケート」の結果である。1,078票を集め、回収率は44％だった。いくつか結果を紹介すると、大学周辺にいた学生の64％が地震の最中「とても怖い」「怖い」と感じた。地震の当日に困ったことは、「停電」87.5％、「情報のなさ」60.0％、「通信が繋がらないこと」57.2％など。「寒さ対策」も５位ながら42.8％となっている。

地震発生後に役立った通信手段では、「携帯電話での通話」47.3％、「同メール」27.8％、次いでミクシィが9.9％。ツィッターなどを含めたSNSは13.5％となっており（複数回答）、最近の新しいメディアが一定の役割を果たしていることもわかった。

調査にあたった山岸さんは「かなりの学生が集まり、当日の夜を過ごすことでお互い不安を和らげたことがわかった。大学の近くに多くの学生が下宿している本学の特徴が長所となった」と語る。共同研究した前田昭彦教授によると「アンケート回収には専任・非常勤の多くの先生方から協力をいただき感謝する。今後は、この結果を大学の災害対策に活かしていきたい」。詳しい結果は、同ゼミから年度内に報告書としてまとめる。

文大だより

卒業演奏会を終えて

初等教育学科　音楽専攻４年　松山はるか

１月 28 日、音楽専攻で学ぶ 15 名にとって大学生活の集大成である卒業演奏会が催されました。

１年生のころから先輩方がうぐいすホールで素晴らしい演奏をする姿を見てきました。学年が上がるごとに、自分が４年生になった時この大きなステージで演奏することへの期待が大きくなっていきました。いざ演奏会が終わってみるとあっという間でなんだか寂しい気持ちになりました。

音楽専攻では毎年春と秋に学生主体のコンサートが行われます。専攻の学生はそのコンサートに向けてそれぞれが一生懸命練習をします。私も聴いている人の心に曲のイメージや情景が浮かぶようにと、毎日のように音楽棟で練習をしました。入学してすぐに行われた春のコンサートでは、緊張しながらも仲間と励まし合いながら精一杯演奏したことを覚えています。

ピアノを弾くことが好きでここまで続けてきたはずなのに、思うように弾けないもどかしさや、弾かなければならないという現実から逃げ、ピアノを弾くことを遠ざけてしまった時期もありました。一生懸命に取り組む仲間はどんどん上達していき、そんな仲間と自分の差を理解しつつも、その差を縮めようと努力をすることさえも嫌になっていました。

そんな私を救い、元気づけてくれたのは同じ音楽専攻の仲間や、所属するサークルの友だちの存在でした。気分転換をしようと食事に誘ってくれたり、電話やメールで心配してくれたり、ずっと話を聞いてくれたりと、様々な形で支え、励ましてくれました。そんな仲間や友だちのおかげで、もう一度自分のピアノと向き合ってみようと思えるようになりました。

私はいままでピアノを弾くということは、一人で頑張らなくてはいけないものだと思っていました。しかし、互いに励まし合い、高め合える仲間がいつもそばにいてくれることに気づくことができました。そんな大切なことに気づかせてくれた音楽専攻で過ごした４年間、たくさんのことを乗り越えながら仲間とともに成長することができました。

どんなときも温かく熱心にご指導してくださった先生方、ともに学んだ音楽専攻の仲間や後輩、友だち、いつも見守ってくれている家族、ここには書ききれないほどたくさんの人たちとの出会いがあったからこそ、ここまでピアノを続け頑張ることができました。

今日まで学んできた音楽の楽しさや乗り越えてきた辛さを忘れず、これからも音楽を続けていきたいです。本当にありがとうございました。

演奏会後 ステージにて

文大だより

卒業制作展を終えて
－仲間とともに学んだこと－

美術専攻立体ゼミ４年　堀内　悠

私たちが所属する初等教育学科美術専攻では、２月６日～２月12日の７日間、コミュニケーションホール・アートシアターにおいて卒業制作展を開催しました。お陰様で300人以上の方々に御来場いただき、大成功という形で会期を終えることができました。

本展覧会は「個々の違った個性が融合し、新たな芸術空間をつくる」というコンセプトのもと「化学反応」というテーマを設定しました。私たちは本年度１年間、美術専攻で学んだ全ての集大成として制作活動を行うとともに、最高学年として、専攻の中心となり過ごしてきました。それは、教員採用試験や就職活動、卒業論文が重なり目の回るような忙しい時間でもありました。しかし、その中で仲間の作品を観たり、一緒に作業するなど多くの人々と関わることができました。率直なところ、一人では心が折れてしまいそうになることも多々ありましたが、まわりの仲間と支え合いながら制作をすすめることで、多くの困難を乗り越え、充実した時間を過ごすことが出来ました。時には制作の合間にお茶をのみながら談笑することもありました。それは、お互いの作品について意見を述べあうなど、とても楽しく有意義な時間でした。

思えば２年前の専攻分け以前は、まさか自分が美術専攻に入るとは思いもしませんでした。小学校、中学校ともに私は、図工・美術が大の苦手であったからです。この様に、意志に反して美術専攻に所属することになった私ですが、専攻で学ぶなかで大きな発見がありました。それは、「作品制作とは自己表現である」と気付いたことです。また、制作活動を通じて、他者と関わることの大切さも強く感じました。上手につくることだけが何よりも大切であると思い込んでいた私にとって、それは大きな衝撃であるとともに、考えを改める良いきっかけであり、「自分にもできる」という自信を持つことにも繋がりました。この様に、先生方や仲間たちに自分の作品が認められたことにより、制作活動をより楽しく、意欲的に進めることができるようになりました。

本卒業制作展では、４年生全員が主体となって動き、会場の手配や搬入、搬出までの全てを行いました。ここでも、遅くまで何度も話し合ったり、係ごとに活動したりと、仲間と多くの時間を過ごすことができました。今思い返せば一つ一つの活動が貴重な経験であり、仲間との大切な思い出です。我々にとって、卒業制作展という機会を得て本専攻における学びの成果を、多くの方々に見ていただけたことは、大きな喜びでした。

御来場賜りました多くの方々、厳しくも温かくご指導頂いた先生方、御協力頂いた大学の方々、快く手伝ってくれた後輩のみなさんのご支援がなければ、この卒業制作展を成功させることはできなかったと思います。文末ながら、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

卒業制作展会場で専攻の仲間・先生との記念写真

編集後記

別れにあたり

楠元六男

人はもろもろの学校を卒業し、そして人生のふしめを乗り越えていく。卒業生が去ったあと、学校には新入生たちがやってきて、また新しい時代がはじまる。

大学もまたしかり。本号をひもとくに、卒業生とともに数名の教員も大学の教壇から去っていくことがわかる。大学をかざる顔（教員と学生）は着実に変容していき、雰囲気も微妙にかわっていくのだ。

そんな現象をまえにいつも思うことがある。「卒業」とは、一過性の現象にすぎないのだと。大学四年間、ないしは修士課程をふくめた六年間で業なるものが完成するのだろうか。一応の区切りはつけられようが、大学在籍期に直面した課題は、今後も永遠に私たちの前にある。ならば人生の通過点としての、「卒業」にすぎなかろう。

かの島崎藤村は、「惜別の歌」において、別れそのものを、「悲しむなかれ、我が友よ / 旅の衣をととのえよ」（藤江英輔の改作による）と歌った。むろん、島崎が作詞した時代、また藤江が改作した時代と現代とでは、各々異なる状況にある。「旅の衣」が暗示するものもはげしく違っていく。

しかし、拡大解釈をすれば、この愁いにみちたセリフは、現代においても正しい。そう、新たなる「旅の衣」をそなえねばならないからだ。ここから人生の旅が、本当にはじまっていく。

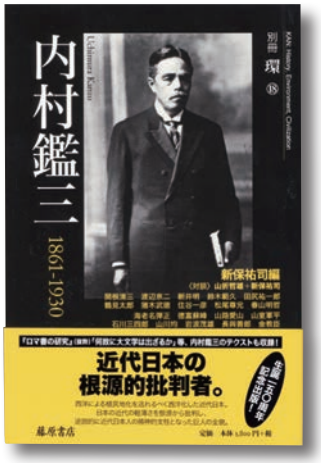
別れと旅立ちの二文字を包含する、このシーズンである。去りゆく人々の今後のご活躍を、ひたすら祈念するほかはない。

しかし我々もまた、旅の途上にある。人間は「日々旅にして、旅を栖とす」（『おくのほそ道』）というではないか。芭蕉の警句は、とどまる者を決して安閑とさせない。我々もまた、「旅の衣をととのえ」る必要があるからだ。

都留文科大学という場で席を並べることのできた幸いに感謝しつつ、去るものととどまるものとが、切磋琢磨できる関係を構築したいものである。そんな願いをこめて、編集後記にかえる。

本　ぶんだい堂

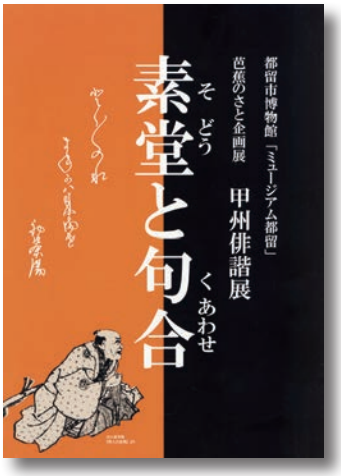
別冊 環⑱ 内村鑑三 1861 ～ 1930



新保祐司／編
2011 年 12 月
藤原書店　3,800 円＋税

◇しんぽ　ゆうじ　　国文学科教授

芭蕉のさと企画展　甲州俳諧展 素堂と句合



都留市博物館　ミュージアム都留／発行
楠元六男／監修
2011 年 12 月　500 円

◇くすもと　むつお　　国文学科教授

都留文科大学広報委員会　鳥原正敏（委員長）・日向良和（副委員長）・坂田有紀子・楠元六男・鷲　直仁・平林祐子・水野光朗
福田誠治（担当副学長）・小笠原武彦（経営企画室）・関戸章雄（情報センター）・小俣昌寛（総務企画担当）